

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第3号

平成29年3月1日発行（抜刷）

皇學館大学創立130周年・再興50周年記念 施設設備整備事業 小史

中 川 正 幸

皇學館大学創立130周年・再興50周年記念 施設設備整備事業 小史

中 川 正 幸

1、学校法人皇學館 施設・設備の概要

本学校法人（大学、高等学校、中学校）の校地面積は179,819㎡、大学は131,446㎡、全体の73%を占める。

大学施設は、創立100周年記念事業（昭和56～57年）で整備された法人本部のある記念講堂・研究棟（3号館）・図書館を中心とした校舎群と、1号館・体育館を中心とした再興当初から10年前後（昭和37～47年）の校舎が点在する北地区といわれる校舎群があり、北地区が今回のマスタープラン（北地区再開発計画）の中心となった。

創立100周年記念事業では、昭和57年旧六角講堂跡地に創立百周年記念講堂、広場を挟み3号館、図書館書庫、倉陵会館（学生食堂）が次々建設され、旧伊勢市立倉田山中学校の校舎（昭和43年取得）はすべて姿を消した。昭和62年には精華寮北寮も新築なった。翌年、神道博物館（佐川記念神道博物館）、平成元年には4号館が完成、さらに平成5年度末には図書館の改築が完成した。平成9年には、倉風ハウスが学生更衣室棟として完成し、平成13年には情報処理教室の入る5号館が完成した。校舎等の改修工事も計画的に行われた。平成14年には貞明寮（昭和58年）の外壁、屋上防水工事及び寮室の改修と学内LANの整備が完了し、剣道場、柔道場も改修が行われた。翌年には、研修・宿泊施設として近鉄から借用した皇學館会館がオープン、旧耐震校舎の2号館（昭和51年完成）の耐震補強工事・冷暖房設備の更新及び教室内改修工事、3号館外壁塗装工事が完了した。記念講堂1階にある法人本部・大学事務室も、最新のOA機器の導入に伴い、大規模な改修工事が行われた。

平成15年度から始まった創立130周年・再興50周年記念施設設備整備事業では、最初の事業として、平成16年3月に精華寮（男子寮）南寮と大広間棟が完成した。翌年、北地区の旧体育館等の体育施設を取り壊し、総合体育館が完成。さらに祭式教室の増改築も完成した。平成19年12月には、記念館の解体移築工事が終了し、翌1月25日には茶室披き「日月庵」が開催された。念願であったテニスコートも人工芝のコートが完成し、夜間照明も設置された。平成22年8月には旧1号館を取り巻くように教室棟（6～8号館）が完成、23年9月には研究室棟（9号館）が完成、最後に旧1号館を取り壊し、跡地に芝生広場が完成した。平成24年3月に当整備事業はすべて終了し、4月、創立130周年・再興50周年記念式典が記念講堂及び一新なった教育研究棟（6～9号館）・総合体育館において盛大に開催された。

名張学舎は、平成10年4月、三重県及び名張市との公私協力により、三重県で唯一の社会福祉学部を名張市春日丘に開設した。校地面積45,018㎡、本部研究棟他7棟からなる校舎と300mトラックを要する全天候型グラウンドなどがあり、平成15年には学生会館を増築、16年には神明宮もグラウンド横に建立された。一時は4学年1000人（総定員880人）の学生数を数えたが、その後徐々に学生数が減

少に転じたため、平成23年3月末で閉鎖し伊勢学園に学部を移転した。なお、校地・校舎及び一部の備品類は名張市に無償譲渡した。

高等学校、中学校の校地面積は、48,378㎡、法人全体の27%を占める。高等学校は昭和38年に開学した年の12月に完成した1号校舎（当時）と昭和40年に完成した管理棟が旧耐震で強度不足とわかり、平成12年に旧1号校舎と管理棟が取り壊され、翌年、新1号校舎が完成した。その前年には旧3号校舎（昭和49年）と5号校舎（昭和58年）を取り壊し、平成11年、新たに校長室、教員室、事務室等が入る管理棟が完成した。その後の耐震診断で旧耐震の2号校舎（昭和53年）、体育館（昭和56年）、武道場（昭和44年）が強度不足とわかり、2号校舎と体育館はアスベスト除去及び耐震補強工事を行い、武道場・弓道場は取り壊され、弓道場跡地に剣道・柔道・弓道場が入る新武道場が平成19年3月に完成した。さらに中学校特別校舎も同時に完成した。グラウンドは、北側を造成拡張し野球場兼用とし、グラウンド西側に3面の人工芝テニスコートが完成した。

中学校は、昭和60年、新校舎が完成し、平成6年には新校舎（現3号校舎）と体育館が完成、定員を80名とし2クラス制とした。平成19年には、普通教室、パソコン教室、300人収容のホールが入る特別教室棟が完成した。

高等学校・中学校は、これまで校舎の増築を重ねてきた結果、校内は迷路と化し、教員室も分散していたが、最近10年の校舎改築・改修により解消され、安全・安心のできる校舎となったといえる。

2、創立130周年・再興50周年記念施設設備整備計画の概要

施設設備計画

平成14年、約1年にわたり地元設計事務所で検討を重ねてきたマスタープラン（通称、北地区再開発計画）は、設計大手の(株)日本設計にマスタープランの設計を変更した。今までは、建設計画地の概容図によって新築校舎の位置を決めていたが、今回は校地全体の測量を実施し、現校舎の位置や近隣の境界線を明らかにして、さらに今回の再開発地区の高低差を正確に測量することとした。この測量図によって、新校舎の位置・規模を検討し、再開発地区内の土地の有効利用や取り壊し予定校舎のローテーションに役立てることとした。平成15年には、創立130周年・再興50周年記念施設設備整備計画に「マスタープラン」を組み込み、新体育館、新1号館、精華寮南寮の建設を決定した。

平成15年12月に開催された記念事業委員会によって、総合体育館の建設、教育研究棟の建設、精華寮南寮の建設を推進することが決定されたことを受けて、緊急を要する精華寮南寮の再建を最優先し、学生寮建設委員会により検討した設計案を、理事会・評議員会の承認を得、約8ヶ月の工事期間を経て、平成16年3月に竣工した。

総合体育館は、総合体育館建設委員会によって設計案の検討を行い、平成18年3月竣工した。また、教育研究棟（新1号館）は記念事業建設委員会によって、旧1号館の耐震補強工事と新築との費用対効果も含めて検討することとなった。マスタープラン敷地内にある剣道場は、平成18年9月までに増築・改修し、新祭式教室に模様替えすること。すでに使用禁止となっている記念館（祭式教室）は、平成19年12月までに移設して同体新築することで、新1号館の建設予定地を確保し、教育研究棟（新1号館）は、平成23年10月完成予定とした。旧1号館は、2度の建築基準法改正により新耐震基準を満たすことができず、学生・教職員の安全対策に問題があること、建築年数30年を超える校舎は耐震補強工事に対する国の補助金制度（文部科学省）が対象外であるため、単独事業では3億以上の資金

が必要であること等により、教育研究棟完成後、取り壊し芝生広場としモニュメントを造ることで決定した。

募財計画

平成15年4月23日の運営協議会において創立130周年・再興50周年記念事業を推進するため、寄付金の募集を決定した。同年5月28日の理事会・評議員会で募集計画が承認され、寄付期間を平成15年6月1日より平成17年3月31日とし、特定公益法人として認可を受けている教学振興会が窓口となった。当初の目標は3億円、総事業経費27億円、事業内容は、精華寮南寮の建設、記念館改築及び周辺整備、伊勢学舎1号館耐震補強並びに同2号館耐震補強及び教室整備、同体育館耐震補強ないし建て替えほか4事業が承認された。平成15年6月4日に開催された運営協議会では、施設整備計画の進め方として、管理運営自己点検・評価委員会で検討することが承認された。同年7月28日の理事会では、募財の目標額を8億円とし、期間も平成15年度から20年度までの5年間、総事業経費を30億円とした。同年8月4日に開催された管理運営自己点検・評価委員会は記念事業のうち再興50周年記念事業について検討し、総合体育館、教育研究棟、学生会館、精華寮南寮の再建、記念館の保存、学園の総合的整備の6事業を答申した。その後、2回の管理運営自己点検・評価委員会及び運営協議会を経て、10月29日の理事会において、記念事業推進委員会の設立及び募金内訳について承認され、委員長に上杉千郷理事長、副委員長に小申熱田神宮宮司、伴五十嗣郎学長が選出された。また、委員には理事・評議員、館友会代表、高校同窓会代表が選出された。平成15年12月17日の教授会において、再興50周年記念研究事業推進委員会の設置について承認され、学長、文学部・社会福祉学部長、研究所長（4研究所）、事務局長が委員に選出された。その後、運営協議会、管理運営自己点検・評価委員会、大学評議会の審議を経て、平成16年2月9日の大学評議会において、総合体育館建設委員会の設置が承認され、野村学生部長を委員長に選出し、総合体育館の基本計画について検討が始まった。3月29日の理事会において、総合体育館建設検討委員会設置の報告及び記念事業推進委員会を6月ごろに開催することを決定した。

ここでの審議・決定事項は、後の記念式典が開催される平成24年3月に新祭式教室を含めた北地区再開発（マスタプラン）でほぼ完成を見ることとなった。

創立130周年・再興50周年記念事業建設委員会の設置（通称、記念事業建設委員会）

創立130周年・再興50周年記念事業建設委員会は、平成16年7月6日に第1回委員会が開かれ、委員会の目的と組織について、基本的な検討が行われた。そこで提示された委員会の目的は、平成17年3月までに、施設の整備と建設についてのコンセプトを取りまとめることであった。この委員会が対象として検討する施設は、先行している総合体育館の建設位置の決定を受けて、新1号館を中心に進められることに決まった。

記念事業建設委員会の対象とする地域は、倉田山地区のどの範囲を指すかが問題となったが、現1号館を中心とした北地区全体について、施設整備を検討するということで一応の確認がなされた。

委員は、理事会として上杉理事長・宗林常駐常任理事、事務局から大竹事務局長、西谷総合企画室部長、橋爪総務部長、中北文学部事務部長、川口社会福祉学部事務部長が出席することとなった。教員側は、大学評議会の議により両学部の運営協議会委員がこれにあたることになり、伴学長、野村学生部長、奥野文学部長、高島社会福祉学部長、島原、林文学部委員、櫻井、宮城社会福祉学部委員が当たった。委員長は指名により奥野文学部長に決まり、事務局は管財課に置き、中川管財課長が担当

することになった。また、各委員に倉田山北部地区のコンセプトは、平成17年1月8日までに提出するよう委員に依頼があった。

基本的コンセプトの検討資料として、

新1号館の建設にあたっては、①文学部の教員定数がどうなるか、現1号館を使用して②事務機能は現在の建物とするのか、職員数は今後どうなるのか。③学部定員、大学院定員、専攻科定員は、現状を前提にするのか。④教室と教育方法については、授業形態と受講者数を想定する。FDと関連視閲の研究が必要か、大教室、普通教室、演習室、実習教室、サテライト教室、教育情報施設など、どの程度必要か。⑤社会福祉学部との学部間連携をどう考えるか。等々教養教育対応施設や教員控室の問題点が提示された。

平成17年1月10日、奥野委員長より、各委員から出されたコンセプト案が纏められ、基本概念と倉田山北部地区の全体概念に分けて提示され、さらに学内に周知するため、「皇學館大学創立130周年、再興50周年記念事業、建設計画の諸概念について」という命題で学内LAN上の掲示板に公開された。

基本概念

- 1、建学の精神と教学の伝統を継承し発展させる意思を表現する。
- 2、神道の思想のもとに自然と人間が調和を保つ環境を回復し保持する。
- 3、世界に貢献する国家有用の人材を育てるに相応しい教育施設とする。
- 4、教育の喫緊の課題に即応する研究環境と社会貢献の機能を充実する。

倉田山北部地区の全体概念

- 1、伝統ある教学の表現：本学の創立と再興の目的を記念する開学記念館、六角講堂、戦没学生慰霊碑等を整備保存し、再興以来の正門道路を維持し桜並木を補植する。
- 2、自然環境の調和保持：神道の精神と調和する環境として、万葉遊歩道を中心とする豊かな樹林を、倉田山地区の全域にわたって保持し、今後の諸計画に残す土地の自然環境を整備する。
- 3、安全快適な教育環境：自然災害に対応する安全な設計の教室と、快適な体育施設や部活動施設を、全学学生の有効利用に応える見地に立って建設する。
- 4、公開される施設機能：地元住民の生涯学習の要望や、各種団体の研修行事の開催等に適う講堂とサテライト教室の施設、公開用スペースや食堂と喫茶を用意する。
- 5、情報化社会への対応：大学運営と教育効果を高める情報処理施設の効率化と、県南地域の社会的要請に応えうる、情報発信機能の集約化と高度化を行う。
- 6、研究室・実験室の充実：既存の研究室の概念にこだわらず、学部教員に等しくゆとりある研究室を整え、あわせて大学院施設と実験施設を充実させる。
- 7、学生対応の機能集約：学生の利便のために現本部棟に学生関係の事務室を集中し、法人の管理機能を集約する計画に対応する施設的な余地を残す。
- 8、道路と駐車場の整備：自動車と自転車・歩行者との通行を分離し、混雑と危険へ対応するとともに、駐車場を制限して静粛な環境の保持に努める。

以上の基本概念と倉田山北部地区の全体概念に基づき、新たに、新1号館（現6・7・8・9号館）、新体育館（総合体育館）、祭式教室、記念館等の諸建物の配置や外観など設計に活かしつつ作業が進められていった。

建設委員会による基本計画（マスタプラン）の作成

平成17年1月26日に開かれた第4回委員会は、新1号館の建設を中心に検討した結果、記念館を職員駐車場に移設したのち、跡地に新1号館建設することを委員会案として決定した。また、現正門からの通学路問題（歩車道分離）も検討されるなど、北部地区全体及びそれに関連する隣接諸施設についても必要とされる検討を加えることとした。

今後の委員会活動として、概念確定後、新1号館の構想として、教育・実習実験棟、大学院・研究棟等の構想が必要であり、さらに祭式教室、駐車場、排水施設、クラブ施設、植栽等緑化計画などを検討する必要があるとした。構想確定後、各施設に関係する教職員を中心に組織した個別委員会が詳細にわたる要望を調整し、隣接地域を含めた計画を確定に、基本設計を委嘱する運びとなることを確認した。

同年2月23日に開催された第5回委員会は、次回会議までに新1号館に盛り込む施設を委員会で検討する。また総合体育館の法面の埋め立てと雨水排水路の整備について申請する。祭式教室は剣道場に移すが関係者の意見を十分取り入れ、教学上の重要な意義をもつ立派な教室とする。クラブハウス、テニスコート、駐車場問題は関係者に意見を求め、本委員会である程度の形にまとめる。歩行者・自転車通路については詳しい設計案を作成し、全学に提案するとした。

第6回委員会は、記念事業建設委員会は、新1号館の総面積を約6,000㎡とし、設備費を除く建設費を12億円とした。これをうけて次回委員会に（株）日本設計の出席を求め、専門的立場から意見を求めるとした。前回委員会で剣道場に移すことに決定した祭式教室は、その詳細を検討するための委員会の委員が選出された。この年に学生部長及び運営協議会委員の交代により、新たな委員が選出された。

第7回委員会は、6月10日に開催され、諸施設の建設計画の進行について審議され、新1号館の詳細も決定するが、建設費については12億円に収めるようにする。現1号館の耐震補強後の再利用も検討する。新1号館の施設内容の詳細を検討する小委員会は、これらの再検討事項を記念事業建設委員会で決定の上、委員を選出し委嘱することとした。

平成19年5月25日、学部長以下の役職者交代により、記念事業委員会も新たな委員が選出され奥野委員会（平成17年度委員会）は委員会の目的であったコンセプトを作成して解散した。同日、新たに選出された委員は、清水文学部長を委員長とする総勢16名で構成された。委員会の目的は、「築45年を経過した1号館に代わる新1号館の建設及び付随する施設設備について、来る平成24年4月30日の創立130周年・再興50周年記念日までに完了することを目標とし、事業の計画と推進を図る」。さらに、新1号館の基本計画完成後、小委員会を設け検討するとした。

相前後して、平成19年3月には、マスタプランに組み込まれた記念館が、記念館保存委員会の建設案決定に基づき建設が始まり、12月20日に竣功した。

以下は、各建設工事に際し、委員会等の審議記録を基に年代順に纏めたものである。

3、精華寮南寮・大広間棟建設

平成15年～16年

精華寮南寮・大広間棟建設

新南寮の再建は、創立130周年・再興50周年記念事業施設設備整備計画の最初の事業として計画さ

れた事業である。基本設計は記念事業建設委員会の命を受け、寮を管轄する学生委員会が検討し建設が進められた。

地鎮祭

学生寮建設委員会（委員長清水潔学生部長、のち渡邊学生部長（当時））によって検討してきた精華寮南寮の建設が、東急建設の設計・施工、日本設計の監修によっていよいよスタートした。

平成15年7月11日、梅雨晴れの旧南寮跡地の建設現場において、上杉理事長、伴学長、ご来賓の小串熱田神宮宮司をはじめとする大学関係者、日本設計、東急建設など、約20名が参列し厳粛に地鎮祭が執り行われた。

完成・竣工

平成16年3月24日、耐震不良の旧南寮の取り壊しから3年、元の場所に白亜の南寮は再建されました。精華寮は、皇學館大學再興と時を同じくして、伊勢市内に14ヶ所あった男子寮を統合し、全寮制を目指して建設された男子寮である。鉄筋コンクリート造り3階建て、ベランダ付きの寮は、当時としては斬新なデザインで、屋上からは伊勢市街地をはじめ伊勢湾が一望できる近代的な建物であった。昭和61年には、玄関ロビー、食堂・浴室が隣接された精華寮北寮が完成し、旧南寮と合わせて2棟となり、収容人員も200人となった。しかし、阪神淡路大震災のあと、東南海地震予知が話題に上る今日、再興当初の建物四棟の耐震診断を行った結果、耐震基準に満たなかった精華寮南寮は使用中止となった。平成13年3月、40年にわたり寮生活を支えてきた南寮は、惜しまれつつも取り壊された（解体工事の終了は4月30日）。

新南寮の概要

新寮は、寮棟・管理棟・大広間神殿の3つの棟からなり、管理棟（北寮と接続する建物）には、図書室、パソコン室、自習室、ミーティングルームといった学習施設を集中させている。特にパソコン室は、パソコン13台・プリンター二台を設置、情報処理センター（学内LAN）と新たに光ケーブルで接続し、インターネット環境の整備が行われ、寮生の情報学習活動の拠点として設置された。また、図書室は従来の4倍以上の広さをもち、36名が一度に学習できる。

寮棟は、北寮とほぼ同等の面積と設備を要し、寮室44室のほか、寮監室2室、談話室、ピアノレッスン室、シャワー室、洗濯室、洗面所などがあり、収容人数は88名、北寮と合わせて116室232名となった。寮室のうち1階の1室は、扉を引き戸にして車椅子でも利用できるようにした。また、シャワー室はクラブ活動で遅くなったときや閉寮中の学生が浴室を利用できないとき等の便宜を図るために設置された。

既設北寮は、今回の増築に合わせて屋上防水工事、外壁補修・塗装工事、内部の全面改修を行い、寮室の内装や備品も更新されている。各寮室には南寮と同様、学内LANの設備も整い、築20年の建物も新寮と同様の様相となった。寮母室も管理棟の一角に新設された。

今回の精華寮増築の大きな特徴は、北寮の隣に建設された大広間棟である。この施設は、畳120畳の広さをもち、正面には神殿が設置され、寮生の朝拝・夕拝の行事に使用することになっている。旧南寮にも、神殿が設置されていたが寮の解体に伴い、部材を祭式教室に保管していたが、名張神明宮を移築した際、神明宮の由緒を記した案内板などに再利用された。なお、神殿は、大学祭式教室（記念館）が耐震不良で使用不能となったため、約2年間にわたり祭式の授業が行われた。

精華寮の増築に合わせて、昭和58年に設置された精華寮正門の白木の門扉と銘板の取り替えも行った。また北寮と南寮の間に芝生広場を整備し、後に体育館の玄関横にあった楠木と、中学校横にあった桜の木を移植している。

4月14日には南寮完成を記念して寮生全員による記念植樹が行われ、南寮に隣接した庭園に楠木と槇が植えられた。精華寮増築という、記念すべき時期に入寮した学生の手で植えられた木々の成長が寮歌「若草もゆる倉田山」となることを確信している。

精華寮増築の概要

・工事の設計・施工

寮棟：設計及び施工：東急建設(株)名古屋支店設計 設計・施工監修 (株)日本設計

神殿：設計：明治記念館（東京）井上秋夫 施工：(株)広垣工務店

・総工費 4億3554万円（内、北寮改修4494万円）

・寮 棟：1階 寮室12、寮監室2、ピアノ室1、談話室1、倉庫、予備室 シャワー室

2階 寮室16

3階 寮室16

・管理棟：1階 図書室、応接室、寮母室

2階 自習室、談話室、ミーティング室

3階 自習室、談話室、パソコン室

・大広間：102畳、神殿部分18畳、祭具倉庫2

棟	面積	寮室数	収容人員
新南寮	2119.47	44	88
大広間	304.87		
北寮（既設）	3241.56	72	144
計	5665.9	116	232



精華寮南寮



大広間棟（神殿）

精華寮増築竣工パンフレットより

全人教育を目指して、充実した学生寮の態勢整う 理事長 上杉 千郷

今日、世界の有名校と云われる英国のケンブリッジ大学、オックスフォード大学やアメリカのシカゴ大学は全寮制をとっており、その全人教育の効果について評価されている。

我国も戦前は高校などほとんど全寮制であり、今日もその教育効果については高い評価を受け

ている。しかし、戦後の我国における学生寮は学生運動の拠点となり、自治の名のもと火炎瓶の製造工場となるなどして、廃止されてしまった。

当大学は、創立当時より全寮制をとり、明治期の学舎の絵図を見れば住教一体であり、全人教育の成果が伺われる。倉田山学舎となり、精華寮、清明寮からなる全寮制が施かれ、戦後の再興後も精華寮と貞明寮が建設され、自宅通学者を除く一・二年生はほぼ全寮制と呼び得る状況が実現された。

これにより、建学の精神を根本とした全人教育の成果が挙がり、各方面から大きな評価を受け、卒業生の結束の強固さは寮生活に起因すると称されていた。しかるに、再興当時の精華寮の南寮が、建物の老朽化により危険であるとの指摘を受け、数年前に取り壊しを余儀なくされた。その結果、男子寮は収容人数が半減し、本学の美風である従来通りの寮運営が続けられなくなり、南寮の一日も早い再建が望まれていた。

この度、本学の創立百三十周年・再興五十周年の記念事業の手始めとして、この南寮の再建が企画され、昨春着工した。工事も順調に進み今春竣工し、四月より入寮出来ることとなった。

本学は、当時の神宮祭主・本館総裁賀陽宮邦憲王から賜った令旨を建学の精神とし、神道を教学の根幹に据える大学として、優れた学問的成果をあげ、多くの人材を輩出して高い評価を得て来たことは、大きな誇りである。

学生寮と云えば、今日の思潮では大多数の人達は、個室で設備の行き届いた厚生寮をイメージする。しかし、今度再建された精華寮は、二人部屋であり、寮の精神的寄り所として全員集合出来る大広間には、神殿が設けられている。その他、自習室を完備し、各室にはコンピュータの配線もある。要するに、本学の学生寮は教育寮であって、単なるアパート、下宿屋ではない。諸設備も、寮教育に重点を置く、本学の姿勢を表明するものとして御理解をいただきたい。

今回の事業は、神社界を始め、各方面よりの御支援の賜であり、厚く感謝の意を表する次第である。そのご高配に報いるべく、当学生寮を最大限に活用し、全人教育の上で劃期的な運用を計り、有為の人材を育て上げる決意であり、今後のご指導を御願い申し上げる次第である。

本学学生の気風を形成する切磋琢磨の場として 学長 伴 五十嗣郎

数年前、大庭脩前学長を本学の伊勢学舎に訪問した中国人学者が、大学構内で行き交う多数の初対面の学生達から、次々と挨拶をされ、非常に驚き、

「大庭先生は学長として学生達に対し、この大学に於いて、いかなる教育を施しておられるのか。この大学では学生達が、見ず知らずの学外からの来訪者に対しても、きちんと挨拶をする。私は非常に感動を覚えた。この大学には、日本の教育の精華がある。」

と開口一番、感激して語ったことがありました。

遠来の中国人学者を感動させた、端正で礼儀正しい学生達の態度は、教職員の指導や日常の感化によるところも、勿論ありましようが、伊勢学舎の場合、主としては学生寮に於ける上級生の指導、寮生活に於ける学生同志の切磋琢磨によるものであると言って、決して過言ではありません。

このように、時には外来者に対しても強い感銘を与える本学学生の気風を形成する上で、大きな役割をはたしている学生寮は、皇學館大学が世の中にその独自性を標榜しうる事柄の中で、最も特色があり、かつ最も重要なものであります。若く未熟な学生達が、一つ屋根の下で集団生活をおくる訳でありますから、時には種々問題を生ずることもあります。それには常に改善を加えて、正しい指導を実現しつつ、学生の自治を中心にした、適切な運営をはかるならば、精華寮・

貞明寮からなる男女学生寮は、他の大学にはない、本学の個性を代表する誇るべき施設になると考えています。

そうした精華寮・貞明寮は、本学が神道を基調とする全人教育を実現する上で、不可欠な存在であり、また、寮生活を体験した卒業生にとっては、卒業後の精神的な結束の核というべき存在でもあります。そのため、平成十三年四月、精華寮の南寮が耐震上の危険から解体され、従来通りの寮運営に支障をきたすこととなってからは、その一日も早い再建を切望する声が、学内外から数多く寄せられておりました

此度、創立百三十周年・再興五十周年記念事業の一環として、第一に着手された精華寮の新築・改修工事が無事完了致しましたことは、元精華寮生である私にとっても、誠に有りがたく、慶賀に堪えません。物心両面にわたり多大の御支援を下された皆様に対して、心から御礼申し上げる次第でございます。

4、総合体育館建設

平成17～18年

総合体育館建設計画・総合体育館建設委員会

新体育館（以下、総合体育館という）の建設は、総合体育館建設委員会（委員長：野村学生部長(当時)）による施設内容の取り纏めを行い、教授会等での設計図の提示や説明を経て、理事会・評議員会の議をもって計画が定まり、平成18年4月からの使用に向けて工事が始まった。

総合体育館のコンセプトは、

- 1、皇學館の新たなスポーツの拠点となる総合体育館をめざす。
—— 創立130周年の歴史を受け継ぐ新しい体育館 ——
- 2、内外の空間の広がりや繋がりを大切にしたい快適で使い易い施設の実現
—— 明快なゾーニングと動線、開放性、バリアフリー、ユニバーサルデザイン ——
- 3、最適な構造計画
—— 授業やクラブ活動における柔軟性や融通性を考慮した最適な建築設計 ——
- 4、環境へのダメージ提言を考慮した環境共生型の施設計画
—— 倉田山の自然との共生を考えた自然換気、通風、採光 ——

記念事業建設委員会が示した倉田山北地区の全体概念を継承しつつ4つのコンセプトを基本に設計が進められた。

総合体育館建設委員会委員（敬称略、いずれも当時の役職及び職名）

委員長：野村学生部長、委員：増井教授（柔道）、河野助教授（クラブ代表）、小木曾講師（体育）
大竹事務局長、中川管財課長

工事の開始

平成17年2月8日、旧体育館及び器具庫、北校舎等の解体工事に先立ち、安全祈願祭が旧体育館で執り行われた。

解体した校舎等は次の通りである。

体育館、体育倉庫三棟、薙刀道場、倉庫二棟、車庫、テニスコート

約1ヶ月に及ぶ取り壊し工事が完了し、赤土色した広大な建設用地において3月9日に地鎮祭が執り行われた。

平成18年

総合体育館の完成

創立130周年・再興50周年記念事業の一環として、平成17年2月より工事を進めてきた総合体育館が卒業式を前に完成を迎えました。総面積5449.17平方メートル、地上2階建て高さ18メートルを誇る総合体育館の1階部分には、公式ルールに則った様々な室内競技に対応するメインアリーナのほか、柔道場、剣道場（薙刀道場）。二階部分にはサブアリーナ、トレーニングルーム、ランニングコース、演習室等を備えている。

正面玄関のガラスカーテンウォールに囲まれたエントランスホールを中心に、その左右に競技空間を配置、館内サインにより利用者にとって分かりやすい施設となっている。さらに室内の開放性のもとより自然採光と自然通風を配慮した造りとなっている。この体育館最大の特徴であるメインアリーナの大空間を実現するために、屋根は調弦梁架構（吊り橋と同じ工法）を採用し、天井材はガラスウールを採用し地震等の揺れでもし落下しても、怪我を最小限におさえることができるようにしています。また、2階手摺の高さを通常の高さより20センチ高い130センチとし、さらに、児童・幼児の転落防止対策として、手摺幅を狭くするなどの安全面の配慮がされています。

総合体育館の建設用地は、旧体育館及び倉庫、北校舎、車庫、学生更衣室などの建物を取り壊し、さらに大学テニスコートを高校テニスコートに移し、工作室裏の谷を埋め立てた場所に建設されました。高校テニスコートは高校グラウンドに隣接した場所に新設しましたが、一部が万葉遊歩道にかかったため、遊歩道の移設を行いました。

なお、総合体育館完成までの間、伊勢市内にある県営サンアリーナを、授業・クラブ活動に長期借用（14ヶ月間）し、スクールバスでの送迎を行いました。

こうして建設事業計画のうち、倉田山北地区のマスタプラン第1号として、130年の歴史を受け継ぐ新しい体育館が1年の工期を経て完成しました。3月30日には盛大に竣工祭が行われました。

総合体育館の概要

工 期 平成17年2月8日～平成18年3月30日

安全祈願祭：平成17年2月8日

地鎮祭：平成17年3月9日

竣工祭：平成18年3月30日

設計・施工 大成建設株式会社名古屋支店

監 修 株式会社日本設計

総 工 費 10億40725千円（備品を除く）

総 面 積 5449.17㎡

1階面積 3466.40㎡

正面玄関、エントランス、

メインアリーナ（バスケット又は排球2面。バトミントン6面又はハンドボール1面）

柔道場、剣道場（薙刀）、男女更衣室（トイレ、シャワー室、ロッカー室）、管理室、

教員控室、倉庫・器具庫

2階面積 1982.77㎡

サブアリーナ、(バスケット1面又は排球1面、バトミントン3面)

トレーニングルーム、多目的スペース、ライトコート・休憩スペース

教員控室、演習室、走路・観客コーナー

その他、エレベータ、階段2ヶ所、搬入用入口、倉庫・器具庫



総合体育館 正面



同 メインアリーナ

総合体育館新築竣工パンフレットより

建学の精神滋養の場として 理事長 上杉 千郷

すばらしい、当校は体育大学だとさえ云える申し分のない体育館が完成した。バスケットボールなど公式試合が幾面もとれる広い高い屋内体育館、更にそれを見おろし乍ら駈けることが出来るトラック、それらに必要な準備室や諸施設、それに武道場も併設され、それこそ体育・武道の殿堂である。我が皇大に自慢のものがまた一つ出来た。心から喜びに堪えない。

私はこう思う。武道・体育の盛んな学校は、大学全般に活気が漲っている。そして何よりもその学校の伝統が感じられ、学生は礼儀正しい。

それぞれの大学には、その学校を創立された折の建学の精神がある。若しその学校が発展しても、建学の目的より離れていては、その学校の存立の意味はない。

この点当校は、全国屈指の歴史を持っている。しかし、終戦後マッカーサ指令により廃校となり、その再興に諸先輩方の命がけの努力の賜により昭和37年再興することが出来た。平成24年は創立130周年、学部再興50周年の節目の年を迎えることになる。

それに対する記念事業の一環として、平成16年3月には男子学生寮精華寮の南寮の再建を行い、今回体育館の完成を見ることとなった。

これらの事業は、神社界始め各方面よりの御支援のお蔭であり、ただ感謝に堪えないところであり、今後この施設を利用する時このことに想いを致して貰いたいと思う。即ち武道も体育も本学の建学の精神の発露の場として、この体育館を活用して貰いたいことを願う次第である。

最後に当学の歴史の中にスポーツに大変ゆかりのある事例を紹介したいと思う。

今日世界用語となっている「駅伝」というスポーツ用語は、当学の第六代館長であった武田千代三郎氏の命名になるものである。

日本の首都が京都から東京に遷った50年を祝う大博覧会が、東京上野不忍の池で開催された折、その行事の一端として、東海道五十三次を23ヶ所で中継走破する競走が企画された。そして主催者の読売新聞社より当時斯界の権威者であった武田館長に、相応しい名称をと相談があり、武田

館長が“駅伝”と命名されたものである。

その後、熱田神宮より伊勢神宮までの全国学生駅伝には、当校の学生が“笏”を受け継ぎ走り優勝したこともあると聞く。その伝統のある我が校である。嘗ての先輩に想いを馳せ、この体育館を活用して、スポーツに、武道に力一杯の精進活躍をして下さることを祈って喜びの言葉とする次第である。

皇學館大学の伝統 “文武兼学”の実践を！ 学長 伴 五十嗣郎

創立130周年・再興50周年記念事業の一環として、精華寮南寮の再建に引き続き、新築工事が進められていた総合体育館が、遂に完成いたしました。皇學館大学再興後の昭和41年に建設された旧の体育館は、老朽化がすすみ、殊に耐震上からは非常な危険が指摘されておりましただけに、上述の記念事業に御協賛下さり、尊い御支援をたまわった皆様の御力によるものと、深く感謝申し上げます。

吹き抜けの2階周囲にランニングコースを設けたメインアリーナに、サブアリーナ・トレーニングルーム・演習室などを付属させ、文学部を中心とする大学の体育館としては、この上に望むところのない程、立派な施設が竣工いたしましたこと、本当に有りがたく、厚く御礼申し上げます。

就中、皇學館大学の新体育館として、この施設が最も特色とし、他に誇るべき点は、館内に柔道・剣道・薙刀道といった武道場を完備していることであります。“文武両道”の兼修を重視し、健全な肉体と健全な精神の両立を目指すのは、神宮皇學館以来の本学の伝統であります。

幕末の優れた国学者鈴木重胤先生が、13歳の門人林伴臣に書き与えた「生涯之心得」には、次のような一節が見えます。

一、文武の心がけ肝要なり。但し、書典を読みひろめたるのみにて、文なるに非ず。行はずんば、何をか文の用とはすべき。武も、人に勝ち弱きをしのぐを以て、何ぞ武とは申され候はん。おのれに勝つといふ勇気を増すために、修する道なり。つとめて文弱になることなかれ。つとめて匹夫の勇にすすむことなかれ。

弱者に打ち勝つ武技を身に付けることが、武道の目的ではない。自己に打ち勝つ精神を修得してこそ、真の武道ということが出来る。机上の学事ばかりの弱々しい人間になってはならない。血気にはやるだけの小勇の持主になってはならないと説く、この鈴木重胤先生の教導は、文武兼学の観点から、武道教育をも重視する皇學館大学の体育の有りかたと、一致するものであります。

皆様の御蔭によって新築なったこの総合体育館が、多角的に優れた学生を育成する上で立派に活用され、伝統の文武兼修の精神を实践する殿堂として、大いなる役割を果たすことを心から確信して、御挨拶いたします。

5、新祭式教室の増改修工事

平成18年

新祭式教室の建設計画

平成15年4月23日の運営協議会において、創立130周年・再興50周年記念事業の内容が審議され、同年5月28日の理事会において精華寮南寮建設及び記念館の移築改修工事が承認された。平成16年9月に発生した地震により祭式教室のある記念館は、被害はなかったものの大きく揺れ、危険と判断されたため、平成16年3月に竣工した精華寮大広間の神殿で授業を行うこととなった。ここでの授業は

約2年余り続いた。新祭式教室の建設は、緊急に解決しなければならない課題となった。

平成18年3月末に総合体育館の中に剣道場が完成するのに伴い、新祭式教室として最も相応しい旧剣道場を増改築して新祭式教室とする案を記念事業建設委員会で検討した結果、マスタープランに組み込まれ、平成18年3月、理事会・評議員会で了承された。

剣道場は、昭和46年、神宮の御厚意により宇治橋前の神宮絵画館を現地に移築し、剣道場として使用していたもので、平成15年は雨漏りと腐食のため、屋根をガルバニウム鋼板に吹き替え、玄関、床、天井、内外の壁、更衣室、教員控室、照明器具増設工事などの改修工事を行っている。

安全祈願祭

平成18年4月7日、斎主本澤雅史神道学科助教授と5名の学生奉仕により工事の安全祈願祭が上杉理事長はじめ学内関係者の出席のもと執り行われ、本格的な工事が始まった。

工事概要

工事の概容は、既存部分の周囲構造体（柱のみを残す）及び屋根、内部欄間、天井を除き解体撤去し、柱の外側に鉄骨で構造補強し耐震性を高め、増築部分に便所、男女更衣室、祭具庫、教員控室などを設けた。教室は、正面に外陣・内陣のある主神殿を設け、脇殿に、旧祭式教室にあった神殿を解体縮小して移設している。玄関は、木曽の檜を使った唐破風屋根のある木造建築で、格天井とともに神殿設計の井上秋夫氏の設計である。外壁は丸柱と漆喰塗で白色を強調し、屋根はガルバニウム鋼板で葺いている。増築部分の350㎡は鉄骨構造であるが、化粧柱に檜木を使用するなど内外とも鉄骨は見えない工夫がなされている。増築後の総面積は、674.24㎡。

この工事は、大成建設の寺社建築の専門家2名のほか元明治神宮技師井上秋夫氏の設計協力を仰ぎ、神殿及び玄関の檜木は、長野県南木曽町の南木曽木材産業柴原氏の尽力により、神殿に相応しい材料の提供があった。建物及び設備工事費2億4千500万円、神殿他木材・工事費4千万円、設計・施工：大成建設（株）、神殿設計・監修：井上秋夫氏、工事：廣垣工務店。竣功及び竣工式は、平成19年9月18日。

新祭式教室の概要

総面積：674.24㎡（増築部分376.78㎡）

神殿2、祭具庫3、手水場1、男子・女子更衣室各1室、教員控室、男女トイレ
湯茶室

祭式教室の歴史

昭和38年9月、精華寮が完成し、3階大広間に神殿を併設、祭式関係の授業を行う。

昭和47年10月、旧神宮皇學館大學本館（現記念館）を移築し、祭式教室として神殿を設ける。

平成16年3月、紀伊半島沖を震源とした地震（伊勢は震度4）により、祭式教室の耐震強度不足が判明、使用を中止する。秋学期より、新築なった精華寮大広間神殿で、祭式関係の授業を行う。

平成18年2月、旧剣道場を新しい祭式教室として耐震補強を含む改築工事に着手する。

平成18年9月、新祭式教室が完成。秋学期（10月）より使用を開始する。



祭式教室 正面



同 神殿

祭式教室竣工パンフレットより

名実共に日本一の祭式教室 理事長 上杉 千郷

本学の表看板とも言うべき祭式教室が美事に竣工した。

すばらしいの一言につきる。神職養成の大任を担っている本学の歴史に残る快挙と言えよう。

実は今日まで祭式教室にしていた、旧制大学当時の学長室のあった現記念館は、老朽化が進みその上耐震性にも問題があることが判り、早急に代替りの施設が求められていた。

ここに本学として最適の建物として候補に上がったのが、剣道場として使用しているこの建物である。第一の理由は、この建物は以前神宮の歴史絵画館であり、神宮古材の丸柱を使用したすばらしい建築である。神宮と本学との関係を考え、御縁深い建物で祭式を習うことは最も理想的である。これにしようと学内の意見も勿論異議はなかった。

しかし、剣道場の行く先はどうか。今回の記念事業の一環に総合体育館の新築の予定があり、剣道場を含む武道関係はすべて収容できる規模であり、その竣工は新年度に間に合った。

いよいよ祭式教室の工事である。何といても神社祭式行事作法の基礎を教授する当大学であり、先ず神殿は本格的なものにしたい。本殿の中に内陣・外陣行事が出来るくらいの余裕が欲しい。大床・階段その他祭式の先生のご意見を十分に取り入れる。すると現祭式教室の神殿はどうしても狭い。そこで神殿全部本格的に新築することになった。旧神殿は脇殿として教室の一隅に設け、二教室として使用できるようになった。

現剣道場の現状では手狭であるので、両側に拡張し、祭式教室らしく手水場も設け、それに男女着替室、教員控室、トイレなども設け、更に神明妻入口の玄関を設けた。ほんとうに至れり盡せり、足を踏み入れると思わず身が引き締まる雰囲気があり、名実ともに日本一の祭式教室である。我が皇學館の自慢の一つがまた増えたと言えよう。

どうかこの祭式教室で祭式を履修し、本学の建学の精神を体し、卒業後各神社に於いてそれを発揮して貰いたいと願うものである。

最後に、この建設を担当してくださった大成建設と神殿工事の廣垣工務店の勝れた技術と施工に謝意を表し、更にこの神殿の設計監理をお引き受け、このようなすばらしい成果を挙げてくださった前明治神宮技師井上秋夫氏に、心より謝意を申し上げたい。氏は熱田神宮・明治神宮の戦災復興に携われ、神社建築の技術に精通されており、本学の精華寮の神殿も手掛けられた。誠に氏の神宮建築に対する造詣の深さと熱意には頭が下がる。心より感謝の意を表する次第である。

新祭式教室の完成に思う 学長 伴 五十嗣郎

皇學館大学が他に誇るべき教育施設が、又一つ竣工した。祭式担当教員を中心とする専門家の意見を可能な限り反映して、指導上の工夫もよく凝らし、受講学生を厳粛で真摯な心へと誘う雰囲気にも溢れた、新祭式教室の誕生である。

昭和37年に再興された皇學館大学では、翌38年9月の男子学生寮「精華寮」の完成と共に、その3階大広間に神殿を併設し、ここで祭式関係の授業を実施した。新生皇學館大学に於ける、最初の祭式教室である。しかし、大学の発展に伴い学生数も次第に増加し、上記精華寮の神殿大広間は、寮行事の朝拝などに於いても、全寮生の収容が困難になるなど手狭となり、祭式及び同行事作法の指導上も支障を来しはじめた。

昭和47年10月、創立90周年・再興10周年を記念して、大正7年建設の神宮皇學館本館を移築整備し、記念館として保存すると共に、内部に神殿を設けて、新たな祭式教室とした。唐破風造りの風格ある玄関車寄せ、奥まって当時の館長室や貴賓室が、そのまま残るこの建物は、大正期の神宮皇學館の唯一の遺構であり、皇學館大学記念館と呼ぶにも相応しいものであった。（平成18年8月、登録有形文化財指定）。

同時に、その祭式教場としての活用は、本学の性格上、何より意義深いものであり、平成16年9月まで実に33年の長きにわたり、祭式教育の場として親しまれ、全国へ多くの優れた神職を輩出してきた。しかるに、老朽化が進んだこの建物は、耐震強度の点で極めて危険であることが判明し、平成16年10月以降は、再建になった精華寮の神殿大広間を臨時の教室として、祭式の授業が行われていた。

ところで、本学では、昭和45年秋、神宮歴史絵画館の建物を御寄付いただき、翌年より剣道場として使用してきた。内部には、神宮古材の丸柱が列立する雅味に富んだ落ち着いた建築であったが、本年総合体育館の完成によって、剣道場がその方へ移動したのを機に、この建物に全面的・大幅な増改築を加えて、此度、はじめに記した新しい祭式教室が竣工したのである。

こうして、本学に於ける祭式教室変遷の歴史を振り返ってみると、誠に感慨無量なるものがある。神道は、何と言っても神祭りを中心として、今日に継承されてきた。従って、神職となる者の第一の使命は、古儀に則った祭祀の厳修にあり、それを学ぶ祭式及び同行事作法の授業は、極めて重大な意味を有している。それ故、この授業に臨む学生達には、服装や頭髪の問題は勿論、祭式教室内での立居振舞に至るまで、常に慎謹の態度が要求されるのである。

見事に完成した祭式教室に臨んで、神道を教学の根幹とする皇學館大学の永遠不滅なることを、改めて確信した次第である。

6、皇學館大学記念館移築改修工事

平成17年～19年

登録文化財へ向けての経緯

平成17年9月初旬、岡田重精名誉教授の発案により、記念館を文化財に指定又は登録したらどうかという助言を得て、岡田照子氏の援助をえて、三重県文化財保護審議会委員の菅原洋一氏（三重大学教授、三重県の文化財委員：建造物）に登録文化財へ向けての御指導を賜った。

登録文化財に必要な条件として、

- 1 皇學館創建につながる由緒ある建物である。
- 2 和風建築で旧内務省の管轄であり、ある時代の代表的な建築物である。
- 3 文化財としては国民に理解を得ることが重要である。

とのことであった。本学は、この建物を移築して内部を改修して保存することについて、文化財登録の障害となるのかという質問に対して、「移築してしまったため登録ができないということはない。そういう例はある」との回答であったが、文化庁は実査（実際に調査）をするため、改修の方法（例えば外観のデザインが著しく変更するなど）によっては、旧建物の状況を残していないなどの問題が生じる可能性があるので、文化財登録を待って移転改修をするのが妥当ではないかという意見があった。

10月に入り、伊勢市教育委員会文化振興課に出向き、申請へ向けての打ち合わせを行い、10月末、同文化振興課に申請書を提出した。申請書はその後、三重県教育委員会文化財保護課を通して文部科学省文化庁に書類が提出された。

12月9日、文化庁文化財調査官1名、三重県教育委員会事務局1名、伊勢市教育委員会文化振興課1名の方々が視察に来られ、申請資料に基づき現況の説明と移築計画の説明を行った。文化庁の意見として、指定文化財について、元の形にするというのが保存修理の大原則で、内部に補強材を入れたりすることは可能であるが、文化財として相応しい補強の方法を慎重に検討して欲しいという見解であった。現地視察後、移築改修時の設計図と屋根裏トラスの写真を提出することとなった。

平成18年9月、名称を皇學館記念館（旧皇學館大学本館）として、文化財保護法第56条の2に規定する文化財登録簿「登録有形文化財（建物）」への登録がなされた。

なお、文化財登録原簿への登録名を「皇學館大学記念館（旧神宮皇學館大学本館）」とした。

その理由として、下記の理由書を提出した（原文）。

名称を皇學館大学記念館（旧神宮皇學館大學本館）とした理由書

歴史的背景

明治15年4月、宇治山田市（現在の伊勢市）の林崎文庫内に、神宮神官子弟養成を主目的とする皇學館が創設され、29年には宇治館町に新校舎が竣工した。明治36年8月、「神宮皇學館官制」が交付され、内務省所管の官立専門学校となる。併せて本科卒業生には、師範学校・中学校・高等女学校の歴史科及び国語・漢文の教員資格を検定により与えられることとなった。

大正7年1月、倉田山の新校舎に移転し、翌8年10月本館が改築落成式を行った。これ以後、皇學館の本拠地として神宮皇學館大學、再興した皇學館大学の現在に至る。

昭和15年4月、「神宮皇學館大學官制」が交付され、大学令による官立神宮皇學館大學に昇格、17年に学部を開設し、祭祀・政教・国史・古典の4専攻が開設され、学部・予科・附属専門部よりなる大学の体制が整備される。

大学昇格に関する動きは、昭和9年11月「皇學館発展期成同盟」が結成され、「大神都聖地計画」が具体化し、紀元2600年を慶ぶ昭和15年に官立大学への昇格を果たした。

この年の国内の大学総数は、帝国大学7校、官立大学12（神宮皇學館大學を含む）、公立大学2校、私立大学26校を合わせて47校であった。平成の時代700を超える大学数に比べて、伊勢の倉田山に存する神宮皇學館大學は、高等教育機関として数少ない大学の一つであったといえる。

昭和21年、連合国軍総司令部（GHQ）の「神道指令」により廃学となり、ここに皇學館創設以来64年の歴史が中断されたが、戦後の神社界・教育界で活躍された卒業生によって「神宮皇學館

大學」の名前は継承され、私立大学となった今尚、恩師の母校として、親しみをもっている父母や入学される学生も多い。

神宮皇學館大學は発足から廃学までの6年間ではあるが、このような歴史的背景を鑑み、登録文化財の名称を、「皇學館大学記念館（旧神宮皇學館大學本館）」として永く保存し、本学の歴史を後世に伝承し、さらに市民に親しまれる施設として公開していくことを目的としたい。

以上の理由により、名称を皇學館大学記念館とし、括弧書きで旧神宮皇學館大學本館として登録したいと考えます。（管財課中川作成）

また、申請にあたり、三重県文化財保護審議会委員菅原洋一氏の作成した「皇學館大学記念館所見」の原文を掲載します。この所見は、解体前の構造、外観、内部の様子を詳細に調査したものを文章化したもので、今となっては貴重な資料と云えるものである。

皇學館大学記念館所見

三重大学助教授

三重県文化財保護審議会委員

菅原 洋一

建築概要

名 称	皇學館大学記念館	1 棟
所 在 地	伊勢市神田久志本町1704	
所 有 者	学校法人 皇 學 館	
同 住 所	伊勢市神田久志本町1704	
構造形式	木造平屋建	
建築年代	大正 8 年	昭和47年移築

所見

皇學館大学記念館は、内務省所管の官立専門学校である神宮皇學館が、宇治から現在地である神田久志本町（倉田山）に大正7年に移転したことに伴い、翌8年に本館として建築されたものである。同校は昭和15年に神宮皇學館大学となるが、昭和21年には廃校となり、敷地・校舎は伊勢市立中学校に転用された。その後、昭和37年に私立の皇學館大学として大正7年以来の校地に再興された。旧本館は昭和47年に校地内で移築され、改造を受けて記念館兼祭式教室として使用されてきたが、平成16年9月末以降は教室としての利用を停止し、今日に至っている。皇學館大学では、神宮皇學館および神宮皇學館大学の歴史を伝える記念的建造物として、記念館の保存には特別の配慮が払われている。

記念館は木造平屋建正面入母屋造背面寄棟造棧瓦葺妻入、玄関車寄唐破風銅板葺（当初檜皮葺）で、小屋組は木造トラス組とする。外壁は布基礎上に付土台を廻らし、腰を下見張り、その上部は化粧柱型を配し、漆喰塗壁面と単窓の上げ下げ窓を組み合わせる。背面とこれに接続する側面後部には、庇を廻し、板床張テラスを張り出す。玄関車寄には唐破風屋根を載せ、車寄独立柱は角柱を3本矩折に抱き合わせ、組物は大斗肘木、中備に蓑股を用いる。

内部は、当初、棟通りに中廊下を設け、その両側を適宜間仕切って、事務室、貴賓室、館長室

などの所用室を設けていた。これらの所用室のうち、背面に位置する貴賓室、館長室の2室は移転に当たっても意匠が維持されているが、それ以外の部分は、用途を祭式教室とするため、移築時に大改造され、当初の間仕切や、天井は撤去されている。

建築に関連する資料として棟札（皇學館大学神道博物館所蔵）が残り、主任技師山口直昭、監督上田萬治郎、武田道晴、長嶋榮次郎、請負人野呂廣吉が判明する。

皇學館大学本館は装飾的な細部を抑制した堅実な意匠、堅牢な構造の建築であり、大正期において、官庁技術者が整備した近代和風建築の水準や動向をよく示している。

以上から、本建物は登録有形文化財登録基準（文部省告示第152号）の「造形の模範となっているもの」に該当するものと考えられる。

参考資料

- ・『皇學館大学百年小史』、皇學館大学
- ・『近代を歩く』、ひくまの出版

移転・改修計画

登録有形文化財（建物）の登録を待って、平成19年2月28日、上杉理事長、伴学長をはじめとする学校関係者・工事関係者が出席し齋主神道学科本澤雅史助教授よって地鎮祭が執り行われ、本格的に移築工事が始まった。

現状の記念館を大学敷地内の職員駐車場に移築し、面積を縮小した後、現在の建築基準法に適合した改築を行い、内部を改装し主に教室として使用する。なお、望見できる範囲での外装の修復に伴う改装・修理は登録有形文化財の規定により全体の25%までとした。

意匠方針

建物全体では、昭和13年の配置図などにより東西方向を6.0m程度短くし、建設当初の長さに戻し38.6mとした。瓦を調査した結果、ひび割れ、変色など傷みが多いので、軽量化を図るため、土は上げず新たに引っ掛け桟瓦葺とするが、瓦屋根形状は変更しない。

西側便所は、昭和13年配置図（事務室）、皇學館大学百年小史（25～26頁）の写真では確認できないため外廊下とし、東西を外廊下の回廊で結ぶこととし、柱位置は現在の下屋庇の形式をそのまま使用した。

唐破風玄関は、昭和47年移築時に変更しているので形は現状のままとし、銅版に葺き替えをする。ポーチ柱は古い柱と新しい柱が混在するがそのまま使用し、階段石造りは、踏みしろが狭く現状では危険であるため、同質石材を使用し4段階とした。天井は現在の格天井のベニア天井板を天然目（杉板）に変更した。

昭和47年以前の写真でみる建物は、束石に乗っている形式と思われる。昭和47年移築時には、建築基準法により布基礎で30cm立ち上げ、土台とボルトで結ばれた。今回の移築に際しては、柱は直接基礎コンクリートに乗せ緊結する方法とした。構造方針は、現行の建築基準法に合致するよう新規に木造で小屋組みを組み立てることとした。

側面の扉（4箇所）及び木製階段（3箇所）のうち、消防法で非常口とする場合のみ残すが、もともと渡り廊下の位置で昭和13年には存在していない。

外壁漆喰は同仕様でやりかえ、下見板は取り外して洗いをかけ再塗装後、使用する。

外壁窓は取り外しそのまま使用するが、雨対策として内側にアルミサッシを取り付け二重窓とした。内部の仕様については、館長室は洋室とするが床の間は残し、旧更衣室は、資料展示室とした。現在、皇學館大學史を展示中である。

記念館の特徴は、会議及び教室として使用することのできるホールと、御茶会のできる和室及び御茶室があることである。和室の柱は、靖国神社参集殿解体に伴い、同玄関御柱5本を頂戴し加工のうえ使用している。また、御茶室日月庵（6.41㎡）は、京都土井亭の茶室を解体移築して、ホール内に復元したもので、裏千家ゆかりの茶室であると云われている。御茶室廻りの敷石、蹲踞の周り石及び館長室ベランダ側庭園の飛び石も靖国神社参集殿玄関の敷石を加工して使用している。

この工事は、東急建設と伊藤工務店が記念館本体の工事を受け持ち、唐破風屋根・玄関ホールは、元明治神宮技師井上秋夫氏の設計協力、広垣工務店の施工、長野県南木曽町の南木曽木材産業柴原氏の尽力により、上無垢の木曽の檜が集められ使用されている。

日月庵は、京都の二村建築研究所二村和幸氏の設計監修、九州長崎の松下建装の工事によった。

建築総額は、建物・設備工事及び備品費3億200万円、茶室日月庵8,500千円。

記念館の概要

建築面積 551.5㎡

館長室、展示資料室、準備室（台所）、ホール、茶室2部屋（和室）、茶室日月庵、事務室
玄関・玄関ホール、男女トイレ

記念館の歴史

大正8年	前年、宇治館町から倉田山に移転したのに伴い、本館として建築
昭和21年	神道指令により廃校となり、伊勢市立倉田山中学校校舎となる
昭和37年	皇學館大學再興
昭和47年	伊勢市から無償譲渡により校地内に移築、祭式教室として使用
平成16年9月	耐震強度不足により教室として使用中止する。
平成18年9月	文化庁の登録有形文化財（建造物）に登録（第24-0061号）
平成19年12月	現在地に移築改築後、記念館として再び使用する。



記念館 外観



同 内部（茶室・日月庵）



旧記念館兼祭式教室

記念館竣工パンフレットより

皇學館大学記念館蘇る 理事長 上杉 千郷

神宮皇學館時代の校舎として、現存する唯一の建築物であった皇學館大学記念館が蘇った。校門より大学構内に入ると、唐破風造りの玄関を備えた美事な建物が目に飛び込んでくる。「息を飲む」光景だ。

長い歴史を秘めたこの記念館は、大正7年1月宇治館町より現在の倉田山に学舎を移した際、その新校舎の中核として「本館」と呼ばれていたもので、上棟は同月15日、落成は翌8年10月18日のことであった。当時は、受付、学生課、教務課などの事務室、奥まって館長室と貴賓室とがあり、学生にとっても、母校のシンボルとして忘れがたい存在であった。

旧神宮皇學館大学に学んだ私にとっても、思い出一杯の建物で、我々が学徒出陣の時、この玄関前に立って見送って下さった当時の山田孝雄学長の御姿が、あざやかに思い出される。

終戦後、神道指令により廃校となるなど、本学は受難の歴史を重ねたが、この「本館」も再び本学の所有となり、昭和47年、創立90周年・再興10周年の記念事業の一環として、皇學館大学記念館として移築保存することを決定し、それに伴う規則も制定された。

その後、祭式教室として使用されて来たが、敷地が湿地であり、耐震上の問題があることも判明した。また、平成18年8月24日には、文化庁より登録有形文化財の指定を受けたこともあり、改めて現在地に移築保存することにした。

外部は往時のまゝの姿を保存し、内部については本学の建学の精神に則して、日本文化の伝承と技術のための教室として使用出来るように、本格的な日本間とし、茶室も設けた。それに会議室と来学者が気楽に休憩出来るような場所も設置し、往時の貴賓室には展示施設を設けて、本学の歴史を物語る資料展示室とした。

茶室は、京都東山の土井家から、裏千家ゆかりの茶室を寄贈していただいた。また、裏千家十五代家元であった玄室大宗匠には、扁額「日月庵」を御揮毫いただいた。

最後に、設計施工を担当された東急建設株式会社の優れた技術と誠意ある工事に対し謝意を表すと共に、玄関部の唐破風を伝統建築の観点から、本来の姿に復原するなどの設計指導に尽力された元明治神宮技師井上秋夫氏、忠実に復元工事に携わった廣垣工務店に厚い感謝を捧げる次第である。また、二村建築設計の指導と有限会社松下建装の多年の経験が相俟って、見事に茶室「日月庵」が復興されたことについても、関係者の熱意に対し、深い敬意と謝意を申し上げるところである。

皇學館大学記念館は、幾多の卒業生と本学関係者にとって、こよなき記念塔としての役割を果

たしているものであり、皇學館大学の生命の蘇りの原点となっている。今後も、ますます有効に意義深い利用が図られることを期待する次第である。

皇學館大学記念館の竣工を喜ぶ 学長 伴 五十嗣郎

「皇學館大学記念館」は、神宮皇學館時代の学舎中、「本館」と呼ばれた中心的建物でありました。神宮皇學館は、大正7年1月宇治館町より、ここ倉田山の地に移転しましたが、館長室・貴賓室・事務室などからなるこの「本館」は、翌8年10月に落成しました。

当初は、現記念講堂前広場あたりにありましたが、神宮皇學館時代の学舎として貴重な遺構であり、大正期の特色を伝える優れた建築であることから、本学が創立90周年・再興10周年を迎えた昭和47年10月、記念館としてここより北西側に移築され、保存が図られてきました。その際、内部に若干の改築を加え、祭式教室として整備し、多くの学生がそこで祭式作法を学び、神職として全国に巣立ちました。

その後、平成18年8月には、国の登録有形文化財（建造物）に指定されました。この登録につき、御尽力下さいました関係者の皆様に、深く感謝を申し上げる次第であります。しかし、老朽化も進み、耐震上の問題が生じたので、文化庁の許可を得て全面的な改築を施し、平成19年12月、この地点に移建しました。

この度の修築では、旧館長室・貴賓室を復元し、貴賓室には皇學館大学の歴史を物語る資料を展示することと致しました。また、京都の旧家から譲り受けた茶室や、二つの和室を設け、茶道や華道などの我国伝統の文化や技芸・精神を教育する場として活用すると共に、それらを通じて地域の人々との交流を、一段と充実させたいものと考えております。

さらに、談話室や会議室として使用できる広間も設けました。これまでは、懐かしい母校を来訪された館友諸賢や、御子弟の様子を見にこられた御両親方が、倉田山の学舎内で落ち着いて御休みいただき、御閑話いただく場所もなかったのですが、今後はこの記念館を御利用いただきたく存じます。

改築復興なった皇學館大学記念館が、多岐にわたって盛んに活用され、建学の精神を正しく発揚する施設として、今後意義ある役割を果たすことを、心から祈念する次第であります。

7、6号館・7号館・8号館・9号館

平成19年～24年

新1号館建設計画・建設委員会

平成19年6月、記念事業建設委員会の下に、1号館建設プロジェクト（委員は教職員10名）、学生福利厚生施設検討プロジェクト（同8名）、新情報処理センター検討プロジェクト（同7名）及び能楽堂設置プロジェクトを組織し、記念事業建設委員会と合同で第1回検討会を開催し、当面は合同で検討会を開催することとなった。また、建築の専門家の意見を聞くことで、建設計画をよりスムーズに運ぶことを目的に、日本設計(株)の設計担当者2名も同席した。第1回合同検討会では、今後のスケジュールの確認と最終決定機関の確認、各プロジェクトの進め方、新1号館の概容を企画書に纏め、その企画書をもって入札を行い、施工業者を決定した上で、日本設計(株)と施工業者、本プロジェクトの三者で基本設計を作成し、平成20年度中に実施設計の作成を完了することとなった。なお、この会合において現1号館の現状と耐震補強工事による再生の可能性と対費用効果も検討したが、新1

号館完成後に取り壊すということを確認した。

新1号館は、主に教育学部が使用する校舎として建設するが、文学部で大教室、中教室が不足しているので、両学部で必要数を検討することとした。また、教育学部では、スポーツ健康科学や保育士過程など従来になかった施設が必要となってくることが明らかになった。

学生福利厚生面では、食堂の席数不足が深刻な問題となっており、倉陵会館をうまく利用しながら新構想に取り込んでいくこととした。その後（平成22年）、食堂は、倉陵会館2階の会議室、就職課等を移転し、厨房及び席数450席の食堂を完成させている。また、6号館1階に60席程度の学生ラウンジを設置し、学生間交流の場所とした。

さらに、新1号館完成後の駐車場の問題も議題に上がった。

第2回新1号館建設プロジェクトでは、入札方法についての方法等の説明があり、総合評価方式の入札方法の説明がなされた。この方式は、設計事務所が作成した基本設計を基に施工各社が金額を競う指名競争入札の方式とは違い、今回は、取引実績のある大手ゼネコンの中で入札予定施工業者を決めておいて、デザイン性（校舎外観、教室配置）、敷地有効活用、既設校舎との連携・技術提案、建設コストといったものを提案してもらい評価点による評価をしていき、施工業者を決める。その設計企画資料は、日本設計(株)に作成依頼し、取引実績のある鹿島、大成建設、東急建設の3社（清水建設は棄権）による現地説明会を開き、総合評価方式による入札を行う。11月中旬には入札を行い、翌年1月中旬に施工業者を決定し、設計は日本設計と施工業者の共同企業体（設計JV）で行い、本格的に設計作業を始めることなどの説明があり、特に質問もなく了承された。

入札及び現地説明会

入札及び現地説明会は、平成19年11月19日に行われた。参加業者は、鹿島（株）、大成建設（株）、東急建設（株）の3社とともに皇學館での工事に精通した大手ゼネコンである。本学からは、宗林常駐常任理事、大竹事務局長、中川管財課長他1名と日本設計から2名が出席した。大竹事務局長より、工事名を「皇學館大学伊勢キャンパス新一号館建設プロジェクト」とし、工期は、第1期工事を平成21年10月1日から平成23年2月28日まで、第2期工事を平成24年2月29日までとするなどの工事概要等の説明があった。

また、日本設計から、本工事は、(株)日本設計名古屋支社が作成した設計資料に基づき、指名参加した3社から設計・施工において見積価格と技術提案書を受け、価格と技術的要素を総合的に評価して落札者を決定する技術提案型総合評価落札方式を実施する工事である。なお、第1期工事の予定価格は15億円以下でかつ最低制限予定価格を下回らないこととする。今後のスケジュールは、入札（提出）を平成19年12月11日、業者の決定を平成20年1月17日とし、設計の完了を平成21年12月、工事の完了を平成24年2月とする事などを説明した。

入札結果

平成19年12月20日、(株)日本設計の作成した総合評価の結果を基に、上杉理事長ほか9名の学内評価者による検討がなされ、20年1月17日、入札結果が発表された。総合評価の点数が最高点であり、且つ見積り金額13億円の最低入札価格で(株)大成建設が落札した。

名張キャンパス移転・統合計画の浮上

新1号館は、当初教育学部設置に伴う現1号館の代替校舎として、校舎設計が検討されてきたが、平成20年3月、社会福祉学部の定員充足住率が60%（新1年生）と大幅に減少したことから、同学部の伊勢学舎移転を視野に入れた伊勢学舎全体のマスタープランを作成するよう日本設計及び大成建設へ打診した。また完成時期についても平成22年4月1日を目指すことを依頼した。

4月には、学生の受入れに伴う受け皿としてプラスした新1号館建設計画に変更し、文学部、教育学部、新学部の3学部3000人体制のカリキュラム分析を実施し、校舎規模の設定が行なわれた。その結果、講義室、実験実習室、研究室等からなる延床面積11100㎡の計画と既設校舎の改修が提案された。

提案を受けて、学内役員による検討の結果、校舎面積を8500㎡、既設校舎の改修は行わず、2700人の学生対応とすることを決定した。記念事業建設委員会（委員長：清水文学部長）は、基本方針の決定を受け、3つのプロジェクトによる合同委員会を5回実施し、平成20年5月、平面図が完成し、8月末、理事会・評議員会へ概算見積22億6千万円（校舎建築19億円、インフラ整備9千万円、備品1億5千万円、外構造成工事他1億2千万円）、第1期工事、鉄筋コンクリート造5階建一部3階建約5000㎡の講義棟、同5階建3300㎡の実験実習棟の計画案を議案提出し了承された。能楽堂を除き3プロジェクトの案を最大限、計画に反映した結果となった。

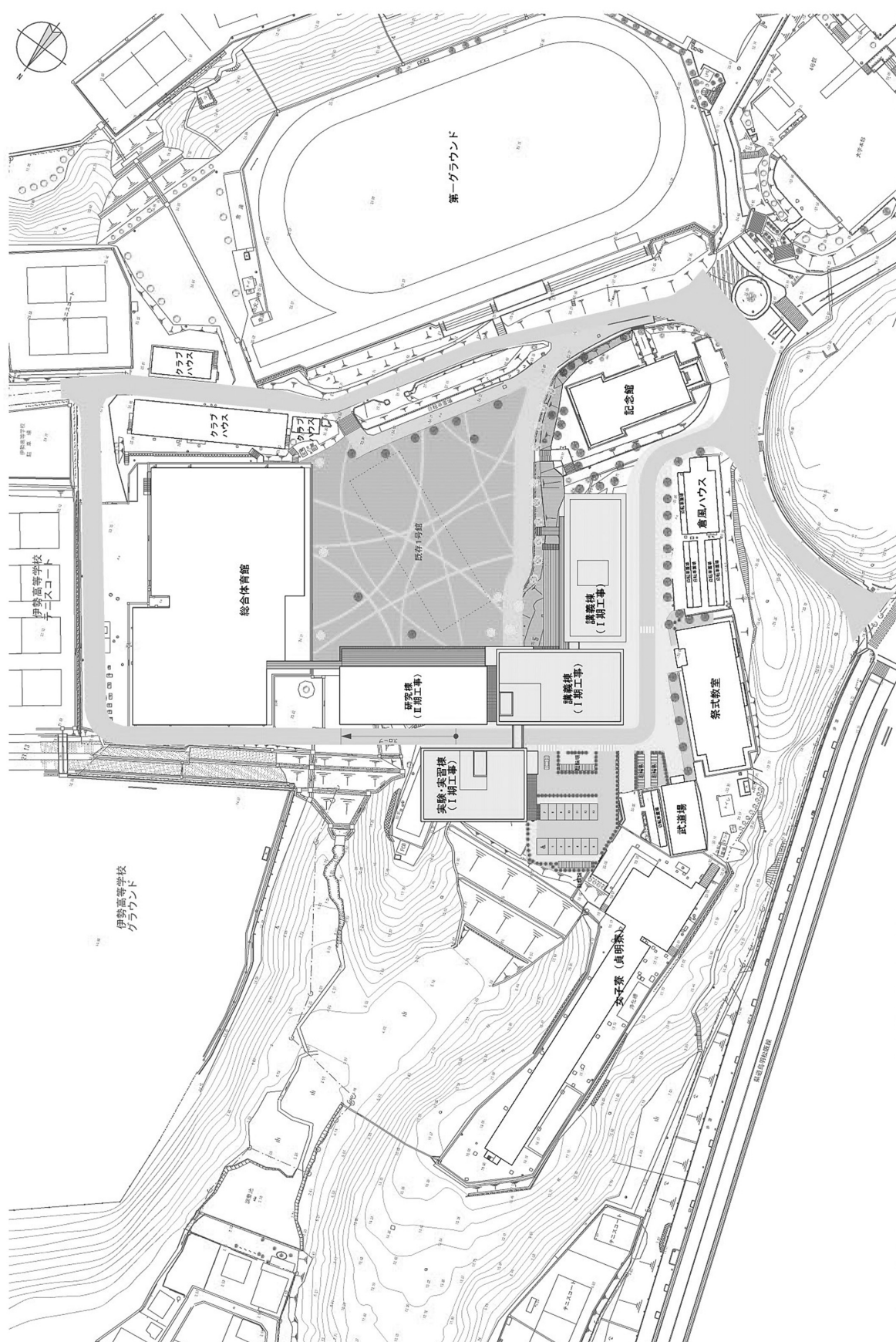
平成21年3月、設計図書完成と契約に必要な概算見積書が日本設計・大成建設（設計JV）より提出された。このとき完成時期を平成22年8月とし、10月から使用できるよう計画変更した。しかし新研究棟の基本計画は出来ているが建設時期を未定とし、現1号館の取り壊し時期も未定とした。

懸案事項として、学生福利厚生施設検討プロジェクトによる食堂及び売店の拡張問題、校舎完成時の駐車場・駐輪場の問題が残った。

マスタープランの進行

新1号館の計画が検討されている間にもマスタープランは着々と進行していった。総合体育館は翌18年3月完成し、北側に駐車場も併設された。総合体育館が完成し剣道場が移ったため、旧剣道場を増改築した新祭式教室が同年9月に完成した。さらに記念館も平成19年12月に移築改修された。

取り壊し建物の工事も始まった。倉友会館は昭和47年10月に父兄会の寄付により建設された宿泊施設で、教職員の宿泊やクラブ合宿の拠点として長年使用されてきたが、老朽化と新1号館の建設予定地にかかるため、残念ながら取り壊しが決まり、安全祈願祭の後、取り壊された。また、貞明寮横の谷間の埋め立ても行われ、実験実習棟完成後、駐車場として整備されることとなった。さらに工作室の一部も取り壊され、新1号館建設のための敷地は確保された。準備工事としてインフラ工事も始まった。現1号館・総合体育館エリア内の電気、上水道、下水道、電話・LAN、及び火災報知器、放送設備配線など、弱電関係の配線替えを行い、すべて地下埋設として電柱を撤去した。



皇學館大学 伊勢キャンパス 新1号館建設プロジェクト

基本計画案 配置図 $S=1/1000$

Copyright (C) Taisei Corporation All Rights Reserved. 080822

新1号館建設工事が始まる

平成21年6月11日、佐古理事長をはじめ、学内外39名の方々が参列し、新1号館地鎮祭が斎主本澤雅史神道学科教授によって執り行なわれた。

6月以降、本格的に工事が始まり、役員出席の総合定例会議が毎月1回、現場事務所会議室で行われ、工事及び設計責任者による進捗状況の説明や現場見学会が行われた。また、工事担当者（設計、建築、本学担当者）による定例会議も週1回行われ、完成まで50回以上を数えた。



新1号館（教育研究棟）の建築（設計）上の特色

新しい校舎「教育研究棟」は、6号館（教室棟）、7号館（教室棟）、8号館（実験実習棟）の3棟で構成された地上5階建て2棟、3階建て1棟、延床面積は8600㎡。3棟は渡り廊下で結ばれ、翌年完成した9号館（新研究棟）も渡り廊下で結ばれている。

設計上の特色として、伊勢キャンパスの自然豊かな伝統ある風景を守りつつ、最新の教育施設としての機能と学生間の交流の場となるラウンジをあわせもつ新しい教育の場として考案された。ラウンジの横には白と黒を基調とした大空間の吹き抜け階段を設置。樹齢約50年のソメイヨシノが一望できる300人教室へと続くアプローチは、伊勢キャンパスの大自然を満喫できる最高の場所といえる。外観の色彩（デザイン）は、先に完成した総合体育館の外観及びロビーの「白」と1階部分のコンクリート打ち放しの形状を新1号館にも取り入れ、完成後のデザインに統一性を持たせている。さらに新校舎には地球環境にも配慮した省エネ効果の高い空調機器や衛生器具を採用したり、直射日光の影響を抑える高性能省エネガラスや、庇の役割を果たす格子状の構造フレームを採用した省エネ校舎となっている。また、障害をもつ学生に配慮し、7号館・8号館にはエレベーターを設置、多目的トイレも1階、2階、4階に配置し、緊急用のブザーを設置している。各階の一般トイレにも小便器、大便器各1箇所に手摺りを設置している。さらに普通教室には、車椅子対応のコーナーを設けている。

工 期：平成21年2月～22年9月（インフラ工事、造成工事を含む期間）

地 鎮 祭：平成21年6月11日

竣 功 祭：平成22年8月27日

設計・施工：大成建設株式会社

監修（設計・施工）：株式会社日本設計

総 工 費：22億5400万円

各棟の概要

・6号館（講義棟）

1階は学生ラウンジと階段・オープンスペース、2階は300人教室、120人教室、3階は、情報処理教室（PC教室）、60台のパソコンを設置、サーバー室は翌年完成する新研究棟を含む北地区における学内LANの拠点となる。

・ 7 号館（講義棟）

120人、100人、50人教室合わせて13室の普通教室を配置し、すべての教室に映像、放送設備を設置してある。

5階は、一時的に教員仮研究室12室を設置し、新研究棟が完成する平成23年11月まで社会福祉学部教員が入ることとなった。現在は、特別支援教育実習室や福祉実習室、体育心理学演習室等として使用している。

2階部分の正面玄関には記念事業のモニュメントと定礎があり、新研究棟完成時に正面玄関まで車椅子対応のスロープを設置する。エレベーター設置。

・ 8 号館（実験・実習棟）

主に教育学部の実験実習棟として使用される。正面玄関に車椅子用スロープを設置している。実験実習用机は、各教科の特徴を十分発揮できるメーカーを採用し、本学のオリジナル製品を製作、「白」を基調とした教室にマッチした色彩家具を配置している。エレベーター設置

1階は、保育実習室、体育実習室

2階は、図画工作室とギャラリー

3階は、心理学教室、家庭科調理室、被服教室

4階は、理科（化学、生物、物理）の3教室

5階は、音楽室とピアノレッスン室、

音楽室には電子ピアノ50台を設置、最新のオーディオ機器を設置している。

ピアノレッスン室は18室あり防音と空調設備が整い、各室にアップライトピアノが設置されている。さらに教員が指導教授できるピアノ指導室が3室ある。



6 号館



7 号館・8 号館

教育研究棟竣工パンフレットより

まなびや ことほ
学舎皇學館の拠点 新一号館の完成を寿ぐ 理事長 佐古 一洵

本学園の発展と共に、今日迄に事務本部を内蔵した百周年記念講堂をはじめ祭式教室、各教室棟・研究棟・図書館・神道博物館・食堂・体育館・記念館等々が校内の各所に林立し、その偉容を目の前にして昔日の感を抱くのは私だけではあるまい。

そのうち所謂一号館は、去る昭和37年大学再興の折に建設されたもので、初期の卒業生にとっては誠になつかしい思い出深い建物である。しかしその一号館も老朽化がとみに進み、耐震の事もあり、これに代わる建築物の必要性が急務となっていた。

頃よし、来る平成24年に皇學館創立130周年・大学再興50周年の佳節を迎えるにあたり、その記念事業として新一号館の建設が実行に移されて来た。

以前私は、江戸時代の藩校に興味を持ち数ヶ所を訪れた経験がある。いずれも心動かされ素晴らしいものばかりであったが、最も印象に残っているのは備前閑谷学校と水戸弘道館である。これぞ神聖な学問に没頭するにふさわしい環境並びに学舎なりと心底うなったものである。

わが皇學館は、神の都伊勢の地にあって置かれた環境は最高で申し分もない。濃淡様々な緑とすがすがしい清浄の雰囲気に包まれた中、今茲に新一号館なる講義棟Ⅰ、講義棟Ⅱ、実験実習棟がこの世に出現した。それはかつての藩校に優るとも劣らぬ学び舎と言っても過言ではない。

その新しい校舎は、地上5階建2棟・3階建1棟で、伊勢キャンパスの自然豊かな伝統ある風景を守りつつ、最新の教育施設としての機能と学生間の交流の場となるラウンジをあわせもつ。更に地球環境にも配慮し、省エネ効果の高い空調機器や衛生器具を採用、かつ日射の影響を抑える高性能ガラスや庇の役割を果たす格子状の構造フレームを蔵した省エネタイプとなっている。故に今後はますます教育の場としての威力をいかに発揮するであろう。

論より証拠、是非とも新学舎を親しくつぶさにご高覧いただくなら幸甚である。

結びに本新一号館竣工にあたり、日本設計・大成建設等工事関係の方々はもとより、今日迄多大なご支援、ご助成を賜った神社界を始め、各方面よりのご厚情に対し、深く深く感謝の意を表するものである。

新一号館の竣工に期待する 学長 伴 五十嗣郎

皇學館大学の創立130周年・再興50周年を記念した建設事業の一環として、皆様から御支援をいただき、鋭意工事が進められてきた三館からなる教育研究棟（講義棟2・実験実習棟1）が完成し、この度竣工式が挙行される運びとなりましたこと、誠に有り難く喜ばしい限りであります。

この三館の建設については、その計画の段階から、しばしば「新一号館の建設」と呼ばれてまいりました。新一号館とは、言うまでもなく新たな一号館という意味であり、また、そこでいう一号館とは、昭和37年皇學館大学再興の際、最初に建設された第一号の建物のことであります。

かく言う私は、再興後の二期生であります。受験のため初めて訪れた母館の構内の景観、屋上に翩翻として日の丸がひるがえる白亜3階建ての小さな一号館が、ポツンと一棟だけ建っている景色を、なつかしく鮮明に思い起こすことが出来ます。恩師の先生方は、いずれも未だ御若く、その小さな一号館で、熱誠溢れる講義を展開されました。日本人としての自覚を確立し、その自覚のもとに、日本として、また日本人として譲らねばならないものは何か。失ってはならないものは何か。今、世界から吸収すべきものは何かということを、正しくしっかりと見極める。言わば正しい国際化への対応を実現できる人間となれという、本学建学の精神の骨子を、恩師諸先生から御教授いただいたのは、正にその小さな一号館でありました。

そのように旧来の一号館は、再興後の皇學館教育発祥のシンボルでありました。尔来50年に近い歳月が流れ、一号館の老朽化は著しく、耐震上の危険も指摘される程になりましたので、この度新一号館を建設し、その完成後、朽損甚だしい旧一号館は取り壊すこととなりました。既存の一号館が果たしてきた役割を考える時、今後新一号館が新時代の皇學館の教育研究の象徴として担う責務は実に重要であり、皇學館の新たな発展の上で、多大の成果を収めることと期待するものであります。

末筆ながら、竣工にあたり、厚い御理解のもと多額の御援助をたまわった皆様に対し、また、事故なく無事に工事を終えられた設計・建築関係の皆様の御努力に対し、深甚の感謝を表する次第であります。

新研究棟の建設

新研究棟は、新1号館検討プロジェクトが講義棟・実習棟と同時に検討を重ねてきて、ようやく竣工の日を迎えた。

施設の概容は、鉄筋コンクリート造り5階建てであるが、正面芝生広場からは地形の関係で4階建てに見える。また、隣接する7号館とは一体化した建物に見え、6、7、8、9号館を合わせた延床面積は、11,550㎡となる壮大な校舎になった。

9号館の延床面積は約3000㎡、個人研究室38室、学部研究室3室、学部長室2室、大会議室、小会議室、共同研究室、大学院演習室などの施設が中に入る。3～5階は7号館と渡り廊下で結ばれている。各個人研究室の面積は既設3号館と同等の約20㎡である。主に教育学部と現代日本社会学部の個人研究室及び学科研究室として使用する。

工期は平成22年11月中旬から平成23年10月末、施工業者は、総合体育館、新1号館とデザインやインフラ設備を統一するため、平成19年12月に実施した「技術提案型総合評価落札方式」入札の落札業者である大成建設による継続工事とした。また、設計・施工監修は、施主の監理代行として平成16年より伊勢キャンパスの全体整備計画（マスタープラン）を行ってきた経緯から、（株）日本設計が行うこととなった。竣工は、平成23年10月7日。

研究棟（9号館）の概要

工 期：平成22年10月～23年10月

地 鎮 祭：平成22年11月10日

竣 功 祭：平成23年10月7日

設計・施工：大成建設株式会社

監修（設計・施工）：株式会社日本設計

総 工 費：6億9700万円

総 面 積：2966㎡（899坪）、鉄筋コンクリート造り地上5階建

1階、研究室2、管理室、小会議室2、多目的スペース

2階、教育学部、現代日本社会学部、社会福祉学部研究室、同学部長室2

大学院研究室2、同演習室1、エントランスホール

3階、研究室19

4階、研究室19

5階、研究室10、特別研究室1、大会議室1

各階には、男女トイレ、給湯室、エレベーター



9号館

教育研究棟（9号館）竣工パンフレットより

記念事業の掉尾を飾る新研究棟の完成を寿ぐ 理事長 佐古 一洸

此の度新研究棟（9号館）が、めでたく完成した。皇學館創立130周年・大学再興50周年事業として、一連の記念施設建設計画が去る平成16年に開始されてより、今日迄数々の主要館・学舎等々が順次竣工し、そのフィナーレ・有終の美を飾る注目の建物である。本新研究棟は、鉄筋コンクリート造り5階建て総面積約3000㎡、新1号館三棟同様環境・省エネに配慮した最新機能の整った学舎で、主に将来有望の教育学部・現代日本社会学部の研究室として活用される。

卑近な例えて恐縮だが、「新しい酒は新しい革袋に」と言うコトバがある。130年・50年を大節として、我大学の更なる発展充実の為の入れ物は、茲に過不足なく完備したと申しても過言ではあるまい。

すなわち、神都伊勢倉田山自生林を保存しながら、自然との共生を加味し、緑豊かなすがすがしい清浄さに包まれた教育研究施設として、記念館を中心に今や二つの校舎群が一体となり、学部学科を問わない伝統ある日本古来よりの専門的教育・研究を推進し、幅広い視野をもって現代の日本社会に貢献できる優れた人材の育成と、地域により密着した教育施設としての役割充足を果たすこととなるのである。

茲に全学舎・建造物竣工にあたり、これまでそれぞれ困難な工事を請負って下さった、日本設計・大成建設はじめ一連の各種業者関係の方々に対し、衷心よりその御苦勞を犒い謹んで厚く御礼を申し上げる次第である。

そして何は措いても、今日迄物心両面に亘り絶大なご支援ご協力を頂戴した神社界、館友諸氏はもとより、夢の会など各方面よりのご芳志ご懇情に対し奉り、深く深く感謝の意を表するものである。

新たな教育研究拠点、新研究棟9号館の竣工を喜ぶ 学長 清水 潔

創立130周年・再興50周年を記念して推進されてきた一連の施設設備の拡充整備事業が、いよいよ完結することとなった。新研究棟9号館の竣工である。9号館は昨年8月に完成した講義棟6・7号館、実習棟8号館と渡り廊下で結ばれ、4館一体として教育研究棟と総称し、本学の新たな教育研究活動の拠点となるものである。記念事業の掉尾を飾る最新の設備を備えた新研究棟の完成を、心から喜ぶたい。

「居は氣を移す」という。この一年、新講義棟6・7号館での授業は、教員も学生も自ら士氣が上がり充実している、という声が聞かれた。これに新研究棟が加われば、なお更であろう。言うまでもなく大学は、教育と研究の両輪が一体となって展開される。教員にとって研究室は、学問研究に授業準備に、格闘の場である。同時に、学生の少人数個別指導の場でもある。学生は研究室で、教員が研究に没頭する姿から、またそこで交わす会話から、多くのことを学ぶであろう。

新研究棟は、実質的にも教育学部、現代日本社会学部が中心となって活用される。次代を担う皇學館大学の新たな教学の息吹、清新な学風が、この教育研究棟から生まれることを期したい。

これまで本学の倉田山キャンパスは、2・3・4・5号館に記念講堂、倉陵会館、附属図書館、神道博物館からなる南キャンパスを中心としていたが、これによって、6・7・8・9号館に総合体育館からなる北キャンパスが整備充実され面目を一新、両キャンパスが補完しあい、大学全体として格段に充実した教育研究施設を備えるに至った。この倉田山から、如何なる人材が養成

され、如何なる研究が生み出されるか、いよいよそれが問われることとなった。

最後に、記念事業に特段の理解を示され、格別の御支援御協力を惜しまれなかった関係各位に、満腔の謝意を表すると共に、教育研究の一層の充実をお誓い申し上げたい。

8、記念事業施設設備整備により新設なった施設等

芝生広場

1号館を取り壊した跡地に芝生広場と自転車置き場を造り、周回道路を造るが、桜並木側は自動車の通行は禁止し、歩行者のみとなった。

テニスコート

平成16年11月、大学テニスコートは、総合体育館建設敷地となるため、高校が使用していたクラブハウス裏のテニスコートの土を入れ替えて使用することとなった。

平成20年6月にナイター設備の整った人工芝のコートが完成した。

工事の概要は、テニスコートを全国大会の正規のコート規格に収めるため、一度表面を削り取り平地にして測量を行い、設計図を作成した。その設計図を基に北側及び東側に法面を造り盛り土をして全体面積を広げ、水はけ等の勾配を取りながら側溝を埋め、外周に高さ5mのフェンスを張りめぐらした。次にローラーで地盤を固め透水性のアスファルト舗装を行い、人工芝を敷きラインを張り砂を入れた。なお、9基の照明によるナイター設備も整えられた。工期は約3ヶ月、総工費は、27,300千円。施工は伊藤工務店、長永スポーツ工業。



倉陵会館2階食堂の増設

学生数の増加により学生食堂が手狭となり、食事がとれない状況が続いているため、かねてより学生厚生福利プロジェクトより要望のあった食堂の増設工事が21年度から始まった。

創立100周年記念事業で建設された倉陵会館の2階の大会議室を食堂にするため、1階食堂から2階に上がる階段を造り、机・椅子を置き約140名の席を増設した。22年9月には、2階の就職課事務室を4号館に移転し、小会議室2室を廃止して2階全体を食堂とし、厨房も増設した。その結果、2階全体の収容人数は、約400名となり、1階・2階合わせて約1000人が収容できるようになり多少の混雑は解消された。

総工費は、工事費・備品費を合わせて、約7,300万円、施工は、伊藤工務店。食堂テーブル・椅子の配置デザインは、愛知株式会社（AICHI）。

神宮皇學館大學戦歿学徒顕彰碑の建立については、『皇學館大學百三十年史 総説篇』第八編「皇學館大學の拡充と発展」974頁に詳細が掲載されているので参照されたい。

北地区の再開発により取り壊された建物

① 体育館及び体育器具庫 3 棟

昭和41年2月、元の清明寮跡地に体育館は竣工し、真新しい体育館で第1回卒業式が挙行された。昭和42年10月27日、岸信介元総理大臣をお招きして、体育館で記念講演が行われた。題材は「青年学徒に告ぐ」、講演内容は『皇學館大學講演叢書』第1号として出版部より発刊されている。12月には岸先生を皇學館大學総長に推薦することを決議し、ご快諾を得た。

昭和47年には、皇學館大學創立90周年・再興10周年記念式典が盛大に体育館で行われた。また、昭和57年には、創立100周年記念式典の立食パーティがここでも盛大に行われた。しかし、施設設備の老朽化と耐震上の問題もあり、平成17年2月、取り壊し工事が始まり、平成18年3月、跡地に総合体育館が完成した。



② 旧更衣室 2 棟

平成17年2月、総合体育館建設の敷地となるため解体撤去。



③ 北校舎（薙刀道場）

昭和42年8月、元神宮皇學館大學の校舎を移転改築し竣工した校舎である。当初は教室として使用し、平成元年、薙刀道場として改修した。平成17年2月、総合体育館建設に伴い取り壊し。



④ 車庫

平成17年2月、総合体育館建設に伴い取り壊し。



⑤ ポンプ室

平成18年2月、総合体育館建設に伴い取り壊し。

⑥ 倉友会館

昭和47年、大学父兄会の寄付、特に父兄会長白山桂三氏の篤志により竣功し、研修・宿泊施設として利用された。近年は吹奏楽部のほか、音楽系クラブの練習場所でもあった。平成21年3月、新教育研究棟建設に伴い取り壊し。



⑦ 工作室2棟（旧食堂・売店・喫茶室）

旧食堂は昭和41年10月、旧喫茶室は同46年8月に完成。倉陵会館食堂が完成する昭和57年10月まで、大学直営の食堂・喫茶・売店として営業していたが、その後、教育学科の図画工作室として利用されてきた。

教育研究棟建設（6、7、8号館）に伴い旧喫茶室を解体し、同校舎が完成後、8号館に図画工作室が移り、旧食堂を取り壊す。



⑧ 家庭科室（被服・調理）

昭和53年10月11日完成、鉄骨造カラー鉄板折板葺、平屋建て、面積は254.2㎡、家庭科被服室・調理実習室及び準備室が入り、教育学科の実習室として使用してきたが、平成22年9月、8号館に家庭科被服室・調理実習室が新設されたため解体撤去し、新研究棟建設（9号館）の敷地となる。



⑨ 1号館

昭和37年の本学再興時に建設された1号館の解体工事が始まるのに先立ち、平成23年10月23日、建物の公開と教育学会主催による「さよなら1号館記念懇談会」が開催された。1号館は、教育学科ができた昭和51年、音楽室や理科室などの教室が整備され、さらに昭和56年8月、創立100周年記念講堂ができて法人本部・大学事務室が同1階に移った後は、1号館全体が個人研究室と教室、実習室等になり、その後は取り壊されるまで、教育学科、教育学部の教育研究の拠点としてきた校舎であった。

なお、1号館前にあった庭園の植栽のうち、松は記念館横に、紅葉は8号館前に移植し、ツツジは7号館横へ、その他は貞明寮横の埋め立て地に移植した。



⑩ 昭五会（昭和5年卒業）の記念植樹

昭和55年11月9日、神宮皇學館本科第39回（昭和5年卒）卒業生が卒業後50年を記念して祭式教室（旧記念館）南側に杉5本を記念植樹する。

平成21年3月20日、新1号館建設地になるため、5本のうち4本を伐採。残った1本は、記念館裏庭角の元の場所に保存している。

植樹を行った方々（『皇學館百二十周年記念誌』の最終職歴を記載）

中山 和敬（大神神社名誉宮司）

篠田 康雄（熱田神宮名誉宮司 元理事長 総長）

池田 良八（富士山本宮浅間大社宮司）

岡田 米夫（神社本庁、神宮皇學館大學専門部助教授、神道研究者）

高松 忠清（住吉大社宮司）



9、施設関係年表（再興以降）

年	月	日	
昭和37（1962）	2	21	大学校舎の上棟祭を、大学本館を祭場に斎行する。
	4	25	皇學館大学校舎竣工祭並びに皇學館大学開学式を、伊勢高等学校体育館で挙行する。
昭和38（1963）	9	21	男子学生寮が新築、竣工する。名称を神宮皇學館時代を襲用して「精華寮」と定める。
	12	2	高校、校舎竣工祭（旧1号校舎）を斎行する。
昭和40（1965）	3	30	高校、第二期工事（管理棟）が竣工する。
	6	29	高校、男子生徒寮として、神宮皇學館時代の旧精華寮（6棟）を改修して開寮する。済美寮と名づける。
昭和41（1961）	2	8	体育館兼講堂の新築、竣工式を行う。（高校と共用する。なお、これまで体育館として、神宮農業館の一部を借用する。）
	3	1	高校、正門が第1回卒業生卒業記念として竣工する。
	5	16	元の神宮皇學館大學講堂（当時、倉田山中学校講堂）が、失火により焼亡する。大学精華寮・高校済美寮寮生が消火に協力する。
	10	31	大学食堂が竣工する。
昭和42（1967）	8	22	大学北校舎（平成元年～17年まで薙刀道場として使用）が、元神宮皇學館大學校舎を移転改築し、竣工する。
昭和43（1968）	12		伊勢市立倉田山中学校使用の、旧神宮皇學館大學の校地校舎を買収する。大学キャンパスがほぼ戦前に復する。
昭和44（1969）	4	21	高校、武道館が竣工する。
昭和45（1970）	4	28	大学クラブハウスが竣工する。
	5	6	大学弓道場並びに女子学生寮知新寮が竣工する。
昭和46（1971）	3	30	剣道場・柔道場が竣工する。
	9	6	大学正門が竣工する（平成5年4月、大学正門整備のため取り壊す）。
昭和47（1972）	3	31	女子学生寮淑徳寮が竣工する。これにより分散していた女子寮が集結する。（昭和58年7月取り壊す）
	10	23	元神宮皇學館及び神宮皇學館大學本館（大正8年落成）を移築し、「皇學館大学記念館」兼ねて祭式教室とする。また、倉友会館が、大学父兄会の寄付（とくに父兄会長白山桂三氏の篤志）により竣工し、研修・宿泊施設として利用する。
昭和48（1973）	4	5	大学附属図書館が新築竣工する。10月1日、開館する。（平成4年度、附属図書館新築工事のため、取り壊す）
昭和49（1974）	12	18	高校、校舎建築第3期工事（旧3号校舎）が竣工する。
昭和51（1976）	4	3	本館（旧1号館）を改修し、音楽室・理科室等の教室が整備される。
	4	20	教室棟（現2号館）を新築し、竣工式を行う。
昭和53（1978）	4	8	高校、校舎増築第4期工事（2号校舎）が竣工する。
	10	11	家庭科室（被服・調理）が竣工する。

昭和53（1978）	12	10	高校、「建学の精神の碑」の除幕式を行う。教育勅語と邦憲王令旨（上条信山書）が刻まれる。
昭和54（1979）	10	31	大学クラブハウスを増築する。
昭和55（1980）	2	25	中学校、図書館が完成し、開館する。
	4	1	男子寮として、宮前寮を宮前館（外宮前）の一部を借用して置く。
昭和56（1981）	4	2	女子学生寮貞明寮が竣工する。（命名、学長田中卓。収容者数154名。岸信介総長揮毫の「意貞潔通神明」を掲げる。）
	4	6	相信寮（旧淑徳1・2号館）を開設する。
	4	8	田畑昭典助教授筆による神宮由緒を記す案内板が、内宮・宇治橋前、外宮・火除橋前に設置される。
	4	8	高校、第2体育館が竣工する。
	8	22	旧神宮皇學館大學講堂跡地に100周年記念講堂が竣工する。
昭和57（1982）	1	29	大学教室棟増築（2号館）及び研究棟（3号館）新築工事が、竣工する。西校舎・南校舎を取り壊す。
	2	27	高校、国旗掲揚塔が卒業記念として寄贈され、完成する。（平成12年度、新管理棟及び新1号校舎建築のため取り壊す。）
	10	25	東校舎を取り壊し、倉陵会館が竣工する（食堂・喫茶・会議室・売店などの施設が入る）。
	11	15	記念講堂が、中部建築賞（中部建築協議会）に入賞する。
昭和58（1983）	3	7	高校、特別教室棟（旧4・5号校舎）が竣工する。
	5	9	大学クラブハウスが新たに竣工する。
	7	11	1号館を全面的に洗滌、塗装する。また体育館を全面改修する。
昭和59（1984）	1	10	高校、第2グラウンドが竣工・完成する。
	2	24	精華寮正門が竣工する。
	3	24	大学図書館書庫の増築工事竣工式を行う。
昭和60（1985）	3	8	中学校、新校舎が竣工する。
	6	14	皇學館学園萬葉遊歩道第3期工事が完成し、竣工式を行う。
	9		倉友会館を改装する。
昭和61（1986）	8	3	精華寮寮歌「若草もゆる倉田山」の寮歌碑（館友会会長櫻井勝之進書、倉陵会館西側）竣工除幕式を行う。
	12	12	元清明寮標柱碑「清明寮ここにありき」（元学長高原美忠書）の除幕式を行う。
昭和62（1987）	3	14	男子学生寮精華寮の増築工事が完了し、竣工式を行う。新寮を「北寮」（収容定員144名）、旧寮を「南寮」（収容定員112名）と称する。なお、相信寮は廃止され、神宮に返還される。
昭和63（1988）	7	25	神道博物館が、大学附属資料館として竣工する。なお、敷地は神宮から50年の借地契約により借用する。また、敷地内の知新寮は、取り壊される。
	10	13	大学第1グラウンド改修工事が竣工する。

平成元（1989）	4	1	皇學館大学神道博物館が大学附属施設として設置、発足する。
	4	4	大学教室棟4号館が竣工する。
	10		倉陵会館食堂の増築工事が完了する。
	12	25	高校、図書館の増改築工事を終え、竣工式を行う。翌2年2月に開館する。
	12		大学北校舎を薙刀道場として改修する。
平成2（1990）	2		東側クラブハウスの改築工事を終える。
	6		神道博物館収蔵庫等の改修工事を終える。
平成4（1992）	7		書類倉庫が完成する。
平成5（1993）	7	5	大学附属図書館改築工事が竣工する。旧図書館は取り壊される。
	7	25	館友会100周年記念全国大会を記念講堂で開催し、記念事業として大学正門の改築及び周辺整備をする。
平成6（1994）	3	10	中学校、新校舎（現3号校舎）・体育館が竣工する。
平成7（1995）	8	31	高校、各教室に冷暖房設備を設置する。
平成8（1996）	10	1	大学学内LAN設備が竣工し、学術情報ネットワーク「KOGAKKAN WEB」、大学ホームページをオープンする。
平成9（1997）	10	6	倉風ハウスが、学生更衣室棟として完成する。
平成10（1998）	2		大学4号館にエレベータを設置し、記念講堂と兼用とする。
	3	26	大学名張学舎が、名張市に竣工する。（名張学舎鎮守神明社が、本部研究棟屋上に鎮座する。櫻井勝之進前理事長の発議・篤志による。神宮摂社古材を受ける。）
	10		伊勢学舎貞明寮（女子寮）下にテニスコートが完成する。
	11	8	皇學館中学校創立20周年記念行事を行い、記念碑（校長石田久司書）の除幕式を行う。
	12	14	高校、新管理棟が竣工する。
平成12（2000）	3	末	精華寮南寮が、耐震基準不適合により閉鎖となる。（翌13年4月、解体する。）
	4	2	精華寮南寮の閉鎖に伴い、精華寮五十鈴川寮を臨時に開設する（14年3月まで）。
	12	15	記念碑（「人」の文字のモニュメント及び「皇學館大学」の標識＜法人顧問 櫻井勝之進書＞）を、建学の精神を象徴するものとして伊勢学舎正門横に設置する。
平成13（2001）	12	15	高校、管理棟・1号校舎・5号校舎を新校舎建築のため取り壊す。
	3	16	伊勢学舎5号館の竣工式を行う。情報処理教室・書道教室・講義室・演習室等を設ける。
	3	27	高校、新1号校舎が竣工する。
平成14（2002）	1	24	内親王殿下御生誕記念植樹（御衣黄桜）を、大学伊勢・名張学舎及び高校で行う。
	9	20	女子学生寮貞明寮の改修工事が竣工する。
	12	25	高校、3号校舎増築工事が竣工する。

平成15（2003）	3	末	伊勢学舎、柔道場・剣道場改修工事が竣工する。
	3	末	伊勢学舎、剣道場裏の屋外便所建築工事が竣工する。
	7	15	研修・宿泊施設として、皇學館会館がオープンする。教職員・学生・生徒等を招待し、祝賀会を行う。
	9	22	伊勢学舎2号館耐震補強・改修工事が竣工する。
	9	22	伊勢学舎、記念講堂1階事務室改修工事及び自動ドア設置工事が竣工する。併せて電話交換システム・パソコン類が更新される。
平成16（2004）	9	25	名張学舎学生会館増築工事が竣工する。
	3	末	伊勢学舎第1グラウンド全面改修工事が竣工する。
	3	24	男子学生寮精華寮新南寮及び大広間新築（神殿）工事が完成し竣工式を行う。併せて、北寮の全面改修工事も終了する。
	4	26	名張学舎、研究棟屋上の神明社の移設工事が竣工し、神明宮遷座祭を行う。
	4	27	名張学舎、神明宮奉祝祭を行う。
	8	30	高校、4号校舎の増改修工事が竣工する。
	8	末	佐川記念神道博物館、伊勢学舎図書館玄関に自動ドアの設置工事が竣工する。
	9	末	皇學館大学記念館（祭式教室）の施設使用を禁止する。祭式の授業を精華寮大広間（神殿）で行う。
	10		高校、第2グラウンドにテニスコートの設置工事が完成する。旧テニスコートは大学のテニスコートとして使用する。また、第2グラウンドを野球場とする改修工事が行われる。併せて第3体育館横に便所が完成する。
平成17（2005）	2	10	伊勢学舎、体育館兼講堂、薙刀道場（旧大学北校舎）及び大学テニスコートを総合体育館建設のため取り壊す。
	8	31	高校、2号校舎の耐震補強工事が竣工する。
	10	20	名張学舎駐車場が完成する（用地は、名張市より借地）。
平成18（2006）	2	11	旧神宮皇學館大學講堂（六角講堂）跡地を整備し、終戦60年戦歿学徒慰霊碑を建立し、除幕式並びに慰霊祭を行う。
	3	10	高校、第2体育館・2号校舎アスベスト対策工事が竣工する。
	3	17	皇學館大学記念館が登録有形文化財（建造物）となる。
	3	30	第1グラウンド北側の埋立て造成工事が完了し、駐車場として使用する。
	3	30	創立130周年・再興50周年記念総合体育館が完成し、竣功式を行う。
平成19（2007）	9	18	祭式教室の増改築工事が竣工する（剣道場を用途変更する）。
	3	31	高校、弓道場を解体し、跡地に高校新武道場が完成する。
	3	31	中学校、特別教室棟が完成する。
	12	20	記念館の移築改修工事が完了し、茶室披きが行われる。

平成20（2008）	6	10	大学、硬式テニスコートの改修工事が終了し、人工芝のコートとなる。
	6	30	高校、旧武道場を解体し、跡地を自転車置き場及び駐車場とする。
	9	30	中学校、テニスコートが第2グラウンド西側に完成する。
平成21（2009）	3		倉友会館・図画工作室の一部を解体する。
	6		女子寮横の谷の埋立てが完成する。
	6	11	新1号館建設に伴う地鎮祭が斎行される。
平成22（2010）	8	27	新1号館竣工、6・7・8号館と命名する。
	9		倉陵会館2階を改修して、食堂が完成する。
	11		図画工作室・家庭科室を解体する。
平成23（2011）	10	7	新研究棟竣工、9号館と命名する。
	10	23	さよなら1号館記念懇談会を教育学会が主催し開催される。解体直前の建物内部も公開される。
平成24（2012）	3		1号館跡地に芝生広場及び自転車置き場が完成する。
	4		創立130周年・再興50周年記念式典が2日間にわたり開催される（29日・30日）。

（なかがわ まさゆき・元皇學館大学管財課長）

【編集担当者附記】 本稿は、『皇學館大學百三十年史』各説篇に掲載のため準備された原稿であるが、同書の刊行を見送ることとなったためここに掲載させていただいた。